

翻刻『板倉政要後編』(上)――卷一―卷七――

大久保 順 子

国立国会図書館(旧帝国図書館)所蔵(東京図書館一〇四・一〇五)の『板倉政要後編』は、十五卷三冊の写本である。無色無地で文様の無い表紙(原)に茶色表紙(「帝国図書館蔵」の押し)を補い、一冊に合冊してある。縦二七・二cm×横一九・五cm、料紙は楮紙、袋綴。一帙(後補、紺色布貼、帙簽「板倉政要後編 卷一―一五止」)。

各冊表紙(原)左肩に墨書で「板倉政要後編 自一至五」(第一冊)「板倉政要後偏 自六至十一」(第二冊)「板倉政要後偏 自十二至十五終」(第三冊)とある。各冊の小口に墨書「板倉政要後偏二」(第一冊)「板倉政要後偏三」(第二冊)「板倉政要後偏三終」(第三冊)、また各冊の背にも墨書で「板倉政要後偏自壹至五 壹」(第一冊)「板倉政要後偏自六至十一 貳」(第二冊)「板倉政要後偏自十二至

十五 參」(第三冊)。後補表紙左肩には印刷の双杵題簽「板倉政要 一二三止」(縦一七・七cm×横三・四cm)がある。

紙数全二一七丁(各冊遊紙(前)一丁ずつ、本文第一冊七六丁・第二冊八五丁・第三冊五三丁)。字高約二一・三cm、行数半丁十一行(一行約二〇字)。柱・丁付・匡郭・挿絵は無い。書式は概ね漢字平仮名混じり文で、随所に濁点を持つ。句読点はない。章話題は約四字下げ、話末評や書簡文引用等の箇所は約二字下げで記される。

第一冊一丁表内題「板倉政要後偏卷之二」(序題・目録題・本文題共)に続き序文(題一冊一丁表)。年時・序者名は無し。跋文・奥書・書写年記等はない。各冊に「帝国図書館蔵」朱印(各冊一丁表、縦四・七cm×横四・七cm)、

「明治三〇・一〇・二八購求・図」朱印（各冊一丁表右下、円形直径二・一cm）がある。所々に虫損が見られる。

『板倉政要』の続編として、京都を舞台とした裁判話に編者の話末評を加えた全八十話を収めた作品である。『棠陰比事』『智恵鑑』や『本朝桜陰比事』『本朝藤陰比事』『鎌倉比事』等、古今の先行裁判話を翻案した事件話が多く集められている。本稿はその本文翻刻である。研究史・典拠関係や本文内容の詳細な検討は稿を改めて行うこととする。

（凡例）

- 原文の用字を尊重しつつ、変体仮名・異体字等を（J I S 漢字第二水準まで残しつつ）通行の字体に統一した。
- 仮名遣い・濁点の有無・振り仮名の表記等は原文に従った。また、原文の体裁通り章話題で改行し、話末評は改行して二字下げの形に統一した。原文には無いが便宜上、章話間の空行と、本文章話題下の巻話数表示を設けた。
- 改丁は「^{（一オ）}」（第一丁目表）の形で示した。
- 空白・明確な誤写と思われる箇所は^{（マ）}とし、その他解説上原文の表記に従った箇所は傍線を付した。

（翻刻）

板倉政要後偏卷之一

世に板倉政要といふ秘書あり是を見るに古しへより聞傳へ

たる公事を目前に見るかことくその面白き事言計なし寔に後代の咄の種ともなりつへき書とひとりたのしむ折から友とする法師一つの書を我にあたふ是もまた珍しき公事を記し置ぬ予も若かりし時より見聞したる事とも有を此書に加へ数冊となし板倉政要後偏とはおかましけれと獨樂の便りともなりなんと今こゝに集め置侍るなり

（一オ）
（一ウ）

板倉政要後偏卷之一

目録

- 一 糠味噌桶に納置し金失し穿議
- 一 祖父の子六人祖母の子六人にて合て九人の弁
- 一 傘の論の事^{（マ）}
- 一 巾着切の^{（マ）}
- 一 貪者の金を拾ふ事
- 一 即座に不義を顕す事
- 一 水中の木を伐工夫の事
- 一 旅人遁難を退て井に陥る事

（二オ）
（二ウ）

板倉政要後偏卷之一

糠味噌桶に納置し金失し穿議

（二の二）

昔し都の町に獨りの職人有りしか朝夕かせきに由断なく手

前宜しくて何に不足あらねと妻をも持たす朝夕金のふゆるをたのしみとなしけるか程なく金子廿両たまりけるを隠し置所なく少しの箱に入て糠味噌桶の内へ入置折ふし是を出し翫て樂しみ悦ひけりある時此金うせしかは大きに驚きかなしみしけれどもさかしもとむへき方もなければ泪を流し家主に此事を告しに^(3オ)家主も不便に思へと何ともすべきやふなく同店に住みけるものともよひ集めて此事を語り不残家さかし致すへしと申渡せは何も是を迷惑しいなみければ是悲なく此事時の奉行所へ訟へ出しかは一連の者のこらす召出され御せんきあれとも知れさりしに奉行申されけるは何程隠すとも盗人は他所よりは来るまし店の内に有るに極たる正直に申上は其罪輕かるへし又かくすともたしかなる證據あればとても罪をのかるまし先記録所へ廻し汝等か手を獨／＼かゝすへし糠味噌に入ては三日の内何程^(3ウ)洗ふともそのあしきにほひ爪さきに残るもの也先たて／＼と申渡されければ皆恐れて立退しに其内獨り立さまひそかに右の手を自ら嗅きければそのものをとらへてきひしく拷問有しかは此もの盗たるにまきれなし白状申しけるとかや

評曰此者は彼職人の右隣の男なりしか壁に穴ありける故不断眼見職人時々隣の職人糠みそ桶より少き箱を取出し或はいたゝき或は翫ひ悦ふ風情見へしを始の程は

合点ゆかさりしか後には是金なりと^(4オ)いふ事を察して欲心起り留守を考へ忍入て盗取しされは見るもの聞ものにつけて欲心の起るを慎へき事なり

祖父の子六人祖母の子六人にて合て九人の弁^(二)の二むかし都の邊に老人の夫婦子ども多く家豊にして年久しく暮しけるか飛花落葉の無常にや感しけん忽に菩提心を起し夫婦ともに出家して何国ともなく出行けるに跡に壺通の書置あり親類中子共寄合書置を披き見れば有金諸道具ともに祖父の子六人祖母の^(4ウ)子六人以上九人にほどよく御与下さるへし由所の名主組中へ宛名して書置けり早速名主組中其外智恵ある老人など披露しければ皆／＼打より祖父の子六人祖母の子六人都合九人へ分け与へよとあるは何とも合点ゆかすと不思議晴れす外に子とも有やと尋けれども外には兄弟ひとりもなしと申ければ此事内證にて濟しかたく奉行所へ訟へ申上けるに奉行速にその事を發明してその家にたくわへありし金銀諸道具九つに割九人の子ともに与へしと言渡しければ名主組中何も口を揃へ書置に^(5オ)祖母の子六人祖父の^(5ウ)六人とあるへし給へは十二人有へき所今実に子共九人のみ御座候ゆへ何とも合点参らぬよし伺ければ奉行笑ひいかさま汝等か愚かなる分別にては合点行まし是は祖父の先妻の子有しなり後の妻祖父方へ縁付時先の夫

の子三人を連来るなり其後に夫婦の間に父三人の子出生したるなり然らば祖父方にも六人の子あり祖母の連来る子三人後に産たる子三人都合六人の子祖母も有筈なりと弁せられければ何も奉行の才智捷披を感じ有難しと謝して退きそのまゝ九人の子ともに^(三ウ)家財金銀を配分し何も中よく繁昌せしとなり

評曰祖父と祖母の各先妻先夫の間に出生したる三人の子ともを両方へ分けたる奉行の頓智の程聞人何も心伏し驚けるとかや老後に出生したる三人の子ともは金銀を多く配分せられし由聞へぬ是亦その所置を得たりといひつへし

又評曰老人夫婦異腹の子共多ければ後に兄弟財を争はん事を知て奉行の裁判を決しめんとあらかしめ隠證作り置しその智深きかな^(六オ)

傘の論の事

(一の三)

むかし都の町にて俄に大夕立にて雨瓶を翻す如く往還水流て海のことくなる折から一人の正直らしきもの傘さして心静に通るものあり又壺人の利口らしきものぬれながら来たり此傘の内しはらく御かし給はるへしと腰をかゝめいんきに請しかは傘の主彼か衣服のぬれたるを見憐の心を起して安きことなりとくく人給へそこの宿所迄送り参らせん

と云て互に咄し行ける程なく夕立の空さ^(六ウ)りけなく晴れ夕日はなやかにさし出けりさらはとて互にわかれんとしけるに傘かりたるその傘を持行んとす傘主驚き此傘は汝等かからかさなるを其方少しの内借しくれよと言によりつぶぬれなる躰を不便におもひ雨のはるゝ間此かさに入れ爰までつれ来りしにその礼をは謝せすして却而傘を掠奪んとするやといへは彼利口もの申は汝こそさわいふて我傘に入来りとたかひに争ひ止ねは所のものとも立合て穿義するといへともその傘に名もするしなく紋もなし證拠なければ此事^(七オ)内證にて済しかたく奉行所へ訟ける双方召出され段々穿義有れともたかひに同じ様なる事を争ひ言て一向に埒明ねば奉行暫し思案あり兩人を近く召よせうつむかせ元結を檢察ありしに元結のぬれたる男を汝憎き賊なりと叱り縄かけ穿義あれば此男元来おふちやく者にて他の傘を奪とせしにければ以後身持を改め恩を知りて義を守り業をつとむへしと誠られければ彼傘主は理を得しを悦びおふちやくものも奉行の明智を恐れてそれより行ひをあらため正直ものと成て生産をつとめけると也^(七ウ)

評曰実に神明の有司也驟雨にぬれたるは衣類は天氣よくなれば忽に乾けれども髪を束たる元結のむすひめはいまだぬれてある筈也と察せられしは賢き事也

又評曰衣服は濡たるも天晴は忽に乾べし元結のむすひ

めは乾かたし又諸道具には心しるしを付置へき事也

巾着切の (ママ)

(一の四)

昔し都の町に巾着切あまた群集して洛中洛外往来のもの、下結鼻紙袋印籠巾着を切とり行^(8オ)来^(8イ)のもの、妨となるよし御上へ聞へて奉行その組子に命し賊を追捕せられしにその沙汰をや聞けん賊忽に逃去て何くへや行つらん一人も見へず然るに室町邊の町人某大切なる契券を鼻紙袋へ入れ巾着切にとられ甚迷惑して奉行所へ訟へ出ければ弥巾着切厳しく索求られしかは弥深く身をかくして忝人も出さりし奉行方便をなし暫く此事穿義を止られけるにやうく二三日過て近き頃となりては巾着切の吟味ゆるく成たりとて一兩人出来り祇園あたりの賣茶屋へ来り今日は仕合よ^(8ウ)き杯といひて酒肴を求て吞くひし茶屋の亭主にも價の外に祝儀なりとて金をとらせければ後は茶屋の亭主心やすく咄しける亭主申けるは頃日は貴様方の仲間の御吟味ゆるみめてたし素膚皮太なども在所より帰り来り二條通に新見せを開き呉服を商賣し大に繁昌す此人元は此御仲間なりしか今は好き仕合なり杯と問す語りす豈知らんや此巾着切は元来奉行の心腹の人なりかりに巾着切と出立て此茶屋かものかたりをくわしく聞届けてそのまゝ茶屋の亭主をとらへ引縛り奉行所へ召捕^(9オ)来り^(9イ)厳敷穿義ありければ彼亭主巾着

切の宿老にて仲間の隠家残らす白状して室町邊の町人の失し契券も彼呉服見せ出せし皮太第一番に召とられしに其手より出しかや

評にいわく巾着切のせん儀を止め時日を延し手前より巾着切をこしらへ茶屋へ遣わして心長く穿義ありし故盗人の巢窠ことくく顕れたりせまりて穿義する時は却而賊を索得る事難かるべきの理明察なり

又評にいわく似巾着切真巾着切を捕得す^(9ウ)畢竟是奉行の明智神妙なるもの也

貪者の金を拾ふ事

(一の五)

昔し都の富家の商人の手代主人の金子百両を懷中してある諸侯のもとへ用立に持参すると酒に酔たるにより途中にて落し難義する折から此金子をひろひたるものをたしかに見届たる人有りて金主へ此事しらせければ手代大きに悦ひ彼者と打連れひろいたる者の方へ行て色々の断立て礼金急度遣すへき間右の金子此方へ歸し下さるべきよし様^(10オ)手をすりて申けれ共ひろいたる男肝をつぶしたる顔して扱ゝ是は迷惑なる語かな我等終に金子百両の事はさて置き壺分一つひろいたる事なし定て夫は人違ひなるへしと以の外なるあいさつなれどもひろい取たるを此仁たしかに見届たりと互に争ひ内證にて濟かねは此段奉行所へ申上ければ

双方呼出されくわしく穿義ありしに見届し人もこれといふ證拠なければ兩人申合せて申掛せし筋に落て手代并見届たるものしかり慥なるせうこもなく人に無実の言かけ不届なるなり罷立つへしとの^(10ウ)叱なり双方前を立ける時奉行声かけてひろいたる男の羽織此間中尋有る模様似たり少しの内預り置吟味いたして返すへしと羽織は御前へ止りて双方ともに町人とも腰掛へ廻り相待へしとなれはいづれも暫らくその所に退き扣へけるかくて心腹の同心に如此と命しけるその同心彼の羽織を持て拾ひたる男の宿へ行て其ものゝ女房に申渡けるは御詮義の上其方の夫慥に拾ひたる由白状せり御奉行御慈悲にて其金子半金は下さる筈なり半金我等へ渡すへしと言付けは女房此方の親父は金子拾ひ^(11ウ)たる事なし何の金を渡し申へきと陳しけるととき同心彼羽織を出し定て女房むさとは渡すまし此羽おりを證拠に受取来るへき由則持参せし也其上にも我等を氣遣に思は、その方金子を持て我と同道いたし参るへしと言女房彼の羽織を見て大に驚扱は我夫金子ひろひし事を白状せし事偽りあらしと金子懷中して同心に打連れ奉行所へ来ればそのまゝ奉行かの白洲に於て女房を夫に對面させ吟味を詰られしにそのもの今は偽へきやうもなく我等慥にひろひたる段白状しけるにより則金主へ金子不残帰させ拾ひたる者に^(11ウ)礼金遣すへき事なから一旦偽り諍し罪の重ければ礼

金遣すに及ばずと命せられければと金主は又かのものゝ偽諍しは憎けれと何にもせよ失ひし金の全く歸りし身の悦なれはとて金子少ゝ遣しけるにより夫婦も偽りし事を恥是より心をあらため正直ものとなりて永く金子の家へもむつましく交りしたしみける

評にいわく何の證拠なきに慥なる證拠を出され空中に有を生ずる明智を以不徳の愚夫をしてよく過を改めしめられし賢哉^(12オ)

即座に不義を顕す事

(二の六)

昔し都の町に夫婦くらす商人あり由断なく持せし故手前よろしく何に不足なく渡世ゆたかにしけるに隣りの独とり住の浪人有けるか何頃よりか彼の商人の女房に心を通しなしみ重るに随ひ弥したしみ深くなり二世も三世も替らぬ中となれば今は実の夫うるさく成て何卒去けんとすれとも本より女房の美なる姿に心を迷はししらぬかほにて如何様の事にもいとまつかわす心もなく朝暮女房に機嫌をとり^(12ウ)其上隣の浪人の心易く成るを知りて日ゝ少しも油断をなさねは終には女房心のまゝに浪人とあひ見る事もなりかたきを恨み居たりし或時此家失家^(12エ)ありて亭主焼死したる故此段町役のものども奉行所へ届け奉行大に驚き心腹の与力某をして検使に來らしむ其人失火の委細を詮儀の上手前宜しき

者なるに焼死する事疑ひあり則焼死人の口を割り檢察ありしに口中に炭の少しもなきを見極めてそのまゝ女房を捕らへて奉行所へ引連来て段々嚴敷詮義ありければはしめはいつはりけれど日を経て後遂に白状しけるは^(13オ) 隣の浪人と不義をいたしたくわへたる金子を奪ひ夫を浪人にしめころさせ家に火を付け焼死たる様にたくみし由申ければ忽その隣の浪人を召捕らへられ則重々の嚴科に行はれけると也評にいわく焼死の者の口をわり檢察有し事尤なることなり実に焼死すならば煙の面を掩ふ事の苦しさに口を明きあかくへしさあらは口に炭入るへきなり初くびりころせし故口に灰の少しもなきは疑ひの深き一つなり其上女の身にてさへ遁れ出て火を避ける程なれば男の遁出さる事あるへきや^(13ウ) 疑ひの二つ也又身上相應に宜しき身の少しも焼残りし金のなきは疑ひの三つのふしきある故則女房をとらへ詮義ありしに果して隣りなる浪人の不義顕れしは名将の下には勝たる士あるならひにて此奉行の下に属する与力同心いつれも才智すくれたる人多かりし

水中の木を伐工夫の事

(二の七)

昔し都近き川の中に一つの大木あり是は古へ陸地なりしか後に変して川となりし故也度、^(14オ) 往來の船その木の根

につき當り船具を破損し難義しける故に此事奉行所へ願しかは此段聞届られ根より切とるべきよし申付られしかと早瀬の波の中なればたやすくは切得へからす何れも是になんきいたしたる時奉行水練の上手を伴ひ彼急流の水に入させて根のふとさを計らせてそれよりも大きな桶の底なきを作らせ其木の梢へより彼桶を押入れ上より強く桶を押付置て其内へ人を入内なる水を汲いたさせその後斧を持て安く切たいらせせられけるとそ

評にいわく此工夫いさゝか兒戲に出たるやう^(14ウ) なれとも急流の中なる大木は容易に伐る事あたふましきをかゝる頓智を以て安くと伐られし事その里民の感歎せし事浮たる事にあらす

旅人遁難を避て井に陥る事

(二の八)

昔し都近き在所に有徳なる百姓ありしか旅人來一宿を求めれど主し出逢て叶ふましきと言ひ旅人のいわく日暮道を知らすして行へき方なしせめて門外なりとも一夜を明かせせ玉われと請ひければ主しやむことを得す許し門^(15オ) 傍の小房にやとし食を与へ置しに折ふしその夜深に至りあやしき男しのひ來り此家に入り独の女に様々の財宝をもたせひそかに垣をこへて出行けり彼旅人夜もすから寝られぬまゝに此光景を戸隙より伺見てつく／＼案しけるは夕へ強

て宿を求めし事なれば夜明けなはあるしかならず我をとらへ今宵の盗人なると疑ひいかなる浮めにか合ぬへきさらは我か身に科なふして却て科に沈むへしせんなき宿をかり合せて非分の死をせんよりはとおもひひそかに此所を夜にまきれて逃出てたり道は草深き所にて潰れたる^(15ウ) 魔井の中に落入しか下に何やらん支て水には沈されとも血なまぐさき事甚しく何とやらんおそろしければ早くのかれ出んとすれともほる事あたわすさま／＼苦し居たるに主の家にては夜明けぬれば主し盗人入多く金銀を奪去たり定て夜前宿りし旅人のわざなるへしとあはて騒ぎ人をわかちこゝかしこ索求めけるにかの古井の中に夕へ宿かりし旅人の落入たるを見つけ男共大勢集て盗人を見つけたりと悦て旅人を引あけしにその旅人の衣類みな血に染まり又その下にも人ありけなれば耆人の男入てみるに死したる女耆人有けるを引^(16オ) 出し見れば是はこれあるしの秘蔵せる愛妾なりかの旅人かどわかし盗出し犯さんとするに心に従はねは切殺しその身はあやまちて井の中へ落入たるに違なしとて則此旅人を捕らへ奉行所へ至り事の様を訟へ人殺しの罪檢義を願ひける旅人は元より宿の主の家に盗人入女とゝもに逃出たるを見て自ら盗賊の虚名をうけん事を恐れ走りてあやまちて古井に落入りし事を説といへとも主人の一家辞を揃へて旅人を盗賊なりと訟ければ奉行聞て此旅人を拷問せられ

ければ旅人柔弱の生質にて拷問に堪かねはやく死刑に就んと偽て自ら盗賊なりと白状しけるは^(16ウ) 我昨夜その家に宿りしに彼女を見て心迷ひ夜更て此女と財宝をはぬすみ取かの野につれ来り女をなひかしめんとさま／＼云ければ一向に我を恥しめていさゝかも従ふけしきなければ女を殺し古井の中へ押入れ立退んとせしか天命尽て我もあやまりて井の内へとも落たり財物は井のかたはらに置しか何人か来りて取りたるも知らすとあらぬ事まで白状しける聞人見る人さも有るへし天の網のかゝる所なしと皆人にくみはやく重科に行ひ給へと云けれども盗取し財物のなきをあやしみ速に刑を行はす此旅人を隠密にめしよせ自らとくと見らるゝに柔弱にしてしかもその面色も悪なし盗賊なと^(17オ) すべき人物にあらずとて三四度に及ひ実を答へよと問はされと今更申口違なば又もや重き拷問にかゝるへきと恐れ彼女の命をは前生にて我おひけん因果の道理なるへし別にいふへき事さらになしとその後口を噤て物云わす時に奉行此言葉を聞憐み汝自ら殺人の罪に服すといへとも我ひそかに誣かけにあへるを知れり重て拷問に逢へきにあらす実を以答よとあれば旅人今は恐るゝ事なく答て曰昨夜かの所に宿借りしより以来の事有の儘に申信実にこたへける是により奉行一つの^(17ウ) 謀を廻らし心腹の与力同心を商人に出たゝせひそかに爰かしこ洛外近邊の所ゝ走らせ何となく盗

人を尋ね索せけるこのものともある百姓の小家に行て食物を買求めければ其家に年老せまりたる姥あり此ものともを奉行所の役人なりと知らすた、洛中の商人なりとおもひ言けるはいつそや旅人にせて女を盗出し殺て井の中へ入その身もともに落入てとらへられし盗人の公事はもはや済たるやらんと問けるに此ものどもはやくも心得てその旅人のまねしたる盗人こそ二三日以前に御仕置にあひたると咄せは姥聞て打笑て日扱、其ものは^(18オ)不便の事也今もし盗人の本人頭れ出なは如何ならんといふ役人答てすてに御仕置済たる事なれば假令盗人の本人出たりとも定めて夫は沙汰なしに済むへし杯と物かたりしければ姥小聲になりて申は其女を殺し古井の中へ入たるものは此村の何かしか息子なり仕合ものにてそのもの彼家に久しく心やすく出入し主人のめかけと蜜通し手引させ金をぬすみその罪を他人にゆつりあまつさへその女を殺しぬすみ来りし金にて栄耀をする事よといふ此ものとも聞て夫は何国の家そと問へは則かしこの家なりと念頃におしへけり^(18ウ)そのまゝ姥かおしへの儘に其家へ至り何の労もなく盗人をとらへ雑物のこらすさかし出し厳しく拷問しければ盜賊明白に頭れ重科に行れ旅人は危難をまぬかれ盗まれし家の主も実の盜賊を得たる上に財宝不残取かへしけるを雙方ともよろこひあへりけるとなり

評にいわく奉行盜れたる雑物一色もなき事をふしきに思ひ慈愛を以て旅人をなくさめ問ひて事の実を尽して尋玉ふ故宿かりし宵よりの事具に咄しけるより扱はぬす人近き在所に有るへしと明察^(19オ)ありて役人を商人にこしらへ近邊の里々村々を何となくあるきわざと世間咄しを言わせ此盗人の噂を聞いたさせけること実に明智といふへし旅人柔弱の性質なりといへとも正直なるものなれば神明の加護ありてあやふき難を脱れ奉行生を好の徳ありてよく罪の疑しきを問究めけるこそかしこき事なれ

板倉政要後偏卷之一終

(19ウ)

板倉政要後偏卷之二

目錄

- 一 木綿盜人の事
- 一 母を殺し死骸を捨置し事
- 一 蜜夫下女を殺す事
- 一 人を殺す船頭の事
- 一 不孝の子親を盜人となす事
- 一 首実検にて悪人を知る事
- 一 夕日に写して謀書を見顯す事

(20オ)

板倉政要後偏卷之二

木綿盗人の事

(二の二)

これも都の町の傍に石地藏有けるか緑樹繁茂せし涼しき所なれば盛夏の頃は石をもとろかすへき熱に堪かね往来商人とも来りあつまりて風をむかへ汗をのこひけり或時木綿賣この地藏のそばに木綿の荷物おろし暫し休居たるにとろく寝いりける内におろし置し木綿失せけりもめん賣おどろきあたりを尋けれども初おなしく涼居しものとも、壺人もなしあたりの家に入て誰れ壺人^(21オ)氣の毒といふものもなく却てたわけものうろたへもの杯といひて笑ひあへりけるにより木綿賣大に腹立此段奉行所へ訟へけるされは所のものとも召出され厳しく詮義あれとも何の證據もなけは詮義の種なし奉行暫し思案し大に怒り申付られけるは地藏は人を扶けあわれむこそ誠の佛ともいふへきにかゝる盗人を眼前に見許るし正直の商人に難義させる段とかく不届なるはその地藏めなり此盗人尋出る迄は地藏に縄をかけ所のものとも昼夜十人つゝ急度番を致すへし少しも由断いたし番をおこたるものならは急度^(21ウ)曲事たるへき由を申付られければ所のもの迷惑ながら昼夜拾人つゝ番をつとめけるされとも盗人知る事なし所のもの甚めいわくして何

れも寄合相談いたしけるはケ様に毎日く夜此番を致し渡世なりかたし何れも妻子までなん義に及ふ事これ皆木綿失せしよりの事なり一向に皆、打寄右の木綿わきまへ出し此番いたす事御免し下さるへき段御訴訟申上へきと皆く一決して奉行所へ出不残口をそろへ申せは所の名主成程いづれも申さるゝ道理斯いづれともしらす番を勤め町所の難義ひつきやう木綿さへ弁へは御赦免あるへし急き^(22オ)御訴訟申上へしと此由願ければ奉行聞届けられ然らば汝ら木綿一反つゝ所のもの残らす持参いたすへきと申渡されければ迷惑ながら門なみに壺反つゝ役所へ持参たりしを逸ゝ名を書付とめ置すなはち右の盗れたる木綿うりを召出され所のものとも持来りし木綿残らす出し遣わされ此内に汝か見知りたる木綿ありやと尋ねられしに其内壺反木綿賣の慥に印有をとりいたし此木綿こそ我等木綿にて御座候其外は拙者木綿にて御座なく由に付所の者をまた呼出し右の木綿汝等より弁へ^(22ウ)たれとも木綿うり受取らぬ故かへし遣す也とてことくくかへし則地藏の番も赦免あれば皆ゝ有かたくと罷立つ所右見知りの有木綿持来る男を壺人呼留め此もの詮義あると縄をかけ拷問せしかは此もの地藏の森隠に木綿屋か眠居たりしを幸ひにその荷物を盗取たりと白状申けるゆへ則牢舎せしめ木綿残らす取戻し木綿賣に下され盗人をは三拾貫文の過料を出さしめ所のもの長く地藏の番せ

し褒美とてその三拾貫文を賜りければ諸人皆々奉行の慈悲を感伏しけると也地蔵に縄をかけ所のものに^(23オ)番をいたすへしと申渡されし時は諸人何ともその意をさとさず迷惑せしに盗人出てける後に及びやうやく初よりの明察鑑の如しと感しあまりあり

評に曰民の愚なるを治るはあながち理を以のみなしがたし地蔵を縛り番をなさしむ是奉行の民の愚を導て明に出さんとするの手だて妙なり

母を殺し死骸を捨置し事

(二の二)

昔し都の町に縫裁屋新吉といへるものありしか又古朋輩のうち逸八といへるもの職をなし^(23ウ)ともに身上相應によりしく暮しけるか元来逸八無法ものにていさゝかなる事より新吉を恨み何とそして此仇を報せんと工しかともさせる謀もなくむなしく月日を送りければいよく無念の事に思ひ居けるに折しも逸八母親七拾歳年老て永く病苦にわつらひとても平服なりかたく躰に見へければ幸ひなりと悦びひも死給ふへきなればこの母を殺し仇を新吉にあふせて此ものを人殺の罪に陥入んと彼の病ふしたる母を夜更け人しづまりて逸八母を看病をする躰をして母の胸のあたりを強く押へ一押に^(24オ)押殺しひそかに負て彼の新吉か門口に捨置きさて明る日になりて新吉が門口に老婆の死人ありと所

の大騒となりしかは逸八驚たる躰にて走り来り是日頃中あしければ新吉か我母を殺したるに違なしと名主五人組ともに奉行所へ斯と訴へければすなはちその家の門前に死骸ある事なれば此新吉か殺したるに紛れなかるへし申けれども奉行新吉逸八兩人を召出し兩人の對決せしめ各その辞をとくと聴すまし逸八をねめつけ凡我人を殺さは外所の門へこそ捨置へきにわか門前に捨置く事全く新吉か所為にあらず證據なり然るをみたりに新吉か殺^(23ウ)せるに決定して訟へ出る逸八却而疑敷事なりとてやかて逸八を拷問せられければかく奉行の明察にあひことさら拷問の苦に恐れて我母を自分と殺したるよし有のまゝに白状せしかは終に親殺の大罪に所し磔にかけられけるとなり

評に曰我か母親を殺し人に科をあぶせんと工し大悪人なれば天命のかれかたし奉行の眼を掠めんと思ふとも天豈欺くへけんやいわんやかゝる明智の奉行あるにおいてをや^(24オ)

蜜夫下女を殺す事

(二の三)

むかし都の町に欲ふかき商人ありしか淫乱にして幾人となく人の娘妻杯を犯かしけり其家主他所へ行し留守のうちに誰か所為とも知れずその妻の首を切りてむくろ計を家の内に捨て置けり家主やとへ帰り見れば我か妻ころされ居たり

おとろき立より見れば首はなくむくろ計なりふしきに思ひ
此由舅の方へ行斯と告ければ舅聞て是は外のもの殺したる
には有まし定めて聾の殺したるなるへしと言かけ争と成て
奉行所へ訟へければ奉行申されけるは是は^(24ウ)聾の殺し
たるにてはなし如何様子細有給ふへしと押付吟味してとら
すべしと舅をなため暫く思案あり先我したしみ深き女房を
何程にくき事ありともむさと殺すへき道理なし假令日頃中
あしくすとも難義通るへき方便を分別して或は病死としと
ん死杯にこじつけべきに只今首を切られむくろ計有に驚き
早速舅の方へ告知する事なれば聾の業にてはなしとて其
近邊日用共を壺人も残らす呼出る、汝等頃日送葬の所へや
とわれ何にても不審なる事はなきや少しも偽りなく申上よ
となり皆、いや^(25オ)さやうなる所へやとわれし事なしと
答けるに獨の日用申けるは一昨日某かしの家にやとわれけ
るに下女死したるとて棺に入れか、せられしか殊の外かろ
くして中には死がいなきよふに覺へしと答ければされはこ
そと其埋みし寺へ同心遣し段々詮さくあれは檀家其の家の
下女とて寺の弟子坊主に賄賂まいないして首はかりを埋み
し事あらわれければ直にその首を掘出し持来りけるに舅を
召寄られ見せ給ふに我か娘の首にてはなきと申によりかの
日用をやとひたるものを召捕せられしに彼日頃名を得し好
色の^(25ウ)商人なりそのまゝ拷問に及ふ時そのもの白状し

けるは某の家主の女房と密通し何とぞ我か女房にいたさん
と工みわか家に久々他所より盗来り置き女を欺き首をきり
むくろ計に家主の女房の衣服を着せ首はひそかに寺の坊主
にまいなひして下女の死したる躰にて埋み家主の女房をは
外へかくし置き遂には夫婦になるへき工みなりと明白に申
ければその家主の女房をもめしとられ密夫の上に人殺の罪
重き仕置にあひしとかや

評にいわく下女を殺しむくろを借りて密通^(26オ)せし
女の衣せうを着せ人の殺したるやうに見するおそろし
き智恵なれとも人を殺しいくはくの命をのびんと思ひ
けるや誠におろかなる心なり尤好色にまよひて多く婦
女を犯したる罪科憎むへきの甚しきならずや

人を殺す船頭の事

(二の四)

昔し都の町に江戸通ひする忠次といへる商人ありしに同し
く江戸通ひする儀八といへる商人と同道しいつゝの日江
戸へ商に行へしとやくしけるすてに其時分にもなりければ
忠次^(26ウ)夜ふかに出て川に側に行船をやとひ荷物など取
入て同道の男を待ちけるに自分早く出たる故つれの男もい
また来らず暫らくまつ内にしきりに眠り船頭忠次か懷中に
金ある事を伺ひ知り欲心おこり舟を中流の深き所へこき出
して能くねいりたる商人をひそかにくひり殺し金を奪ひ

死骸に碇をつけて海へしつめもとの川口へ漕来たり偽りて高いひきをかき能くねいりたる様して居たる所へ同道の儀八来り忠次はいかにと問ふ船頭目を覺したる舩にていまた来られすと答ふゆへしからは汝呼てくれ^(27オ)よと忠次か家を教しへ遣しける船頭さあらぬ舩にて忠次か家に行門をたゝき是の御内義御亭主は如何しておそく出させ給ふそやつれの儀八殿はやく舩にありて待かね玉ふ故に呼に参りたりといふ女房おとろき亭主は式時計も先に知られるかいまた舩には参り申さすや不思議なる事かなと言て我も行て見んとて船頭と打連川端まで来り此由を申せは連の儀八肝をけし舟より上りて女房もろとも方々三日の間尋ねけれどもその行方知れさりければ連の男思ふはもし此もの出すは必定我か^(27ウ)難義なるへしと迷惑し人にいわれぬうち此方より申上へくと思ひ此趣有のまゝに書付奉行所へ訟へければ一連残らす召出し吟味あり役人とも何も思ふは商人の妻みたりなる事有つゝ密夫をして亭主を殺させたる成るへしと言しに奉行獨かぶりをふり此趣委しく聞て判断せられけるは船頭商人を呼に来たりし時亭主の名をば呼すして門をたゝき女房に聲をかけ呼出しける事不審なりとて急き船頭を召捕詮義のうへ拷問せられければ終に白状して忠次をしつめたりし所もしれければ^(28オ)死骸をもさかし出し盗取りたる金子も取戻し忠次に返し賜り船頭はその川

端に磔にかけられたるとなり

評にいわく商人金銀を懷中し夜ふかきに宿を出る事不覺悟とや言はん金に心を奪れよしなき悪事を工み人を殺し其身も重き罪にあひけるも大に愚なり諸人の思ひけるは女房不義ありて夫を殺したるへしと思ひけるも尤なれとも其義も假令不義ある共男は海上をしのき遠里へ行く事なれば男を殺さすとも留守の内には如何様^(28ウ)なる事もなるへし殊に驚きて連の男とともに尋ねまはりしゆへ船頭の所為なるへしと明察ありしもことばりなるへし

不幸の子親を盗人となす事

(二一五)

昔し都の邊にある百姓父と別家に住しけるか父は極めて貧しく子の方は夥しく富みくらしけるかある夜子の家へ盗人はいり財宝ぬすみ取出る所を主し聞付やかて是を切ころし急き火をともし見れば父の死骸なれば驚きたる所へ近所の人出合此由奉行所へ訟へける所にその子言親なる事は曾て知らず実々盗人となる^(29オ)へきと思ひきり殺したる事なれば親殺の罪御赦免あり盗人を仕留し御褒美被下べしと願ひける諸人も右の趣に推量したりけるに奉行詮義の上此ものは一段強き罪に行へきものなり大罪の悪人なり夫を如何にといふに己か家はあくまで富さかへなから父に貧なる目

をさせ盗までさせけるは三千第一の不孝の罪きわめて深からずやとやかて親殺の重科に所せられけるとかや

評に曰奉行の裁断誠に明らか也その子あくまでさかへ親に貧苦をさせたるゆへ我か子の^(29ウ)物なから盗し事のあらわれしなり其父羊を盗その子是を證せしよりもその罪十倍せるものなり

又評にいわく父盗に入たるを子知らずして殺したらんは其子の縁は切れたるを以その子をゆるすへし大方は父に盗さするその子の罪輕からさるものなり

首実検にて悪人を知る事

(二の六)

昔し都の町にある商人福貴なる甥をもちけり此甥を何とぞして打ころし其財宝を取らんと^(30オ)工み父子相語らい蜜に彼甥を呼よせ思ふさま酒をしるて酔つふれたる所をなんなく切殺しけるか斯は仕済したれとも若し顕れやすへきとうろたへ廻りいかゝ濟まさんと取／＼談合しけるか稍ありて思出しけるは内々に我か嫁息子と夫婦中あしかりしを幸ひに此嫁をも殺し甥と密通せしゆへなりと訟へんと父子かたらい合て彼の姫も切殺し首を切て兩人の首をもち奉行所へ行き斯と申上げる折ふし夜の事なりけるに奉行燈の本にて彼の首を実検しけるに一つの首は肉も皮も上へまい上り又一つは切て程へし首と見へければ不審^(30ウ)に思召し此

首ともは定て一度に切りたる首なるへしと御尋あれば弥御意の通り兩人伏し居たる所を押へて一度に首を取り申候よし申上る所にいかやう重てせんさく致へしと先親子ながら牢舎仰付られ扱ひそきひそかに彼か宿へ人を遣し幼少なる子とも下人等を召出しおとし偽寄しさま／＼に問ければ幼年の子とも見たる通り有のまゝに云ければされはこそとて父子のものを厳しく責ければ甥の金取らん工みに父子言合て老人つゝ兩度に殺したる次第くわしく露顯して重き咎に行なはれけるとかや^(31オ)

評にいわく二首一度に切たりと訟により切たるに遅速ある事を檢察せられし明智と称すへき事なり是重き罪人なり現世の甥を殺し又科なき姫を殺し幾代の栄花を樂しみと斯る悪事を工みけるやケ程の悪人天のせめのかれんや奉行の智鏡のことし罪科顕れ嚴科に所せし恐ろしき事なり

夕日に写して謀書を見顯す事

(二の七)

むかし都の町の富たる商人の家へ不斷心やすく出入小商人ありしか或時来りて申様内々貴殿へ預け置し金子急に入用出来しける間御返し^(31ウ)被下と申せは亭主肝をけし是はいかなる事を言出し玉ふ其方年久しく我等方へ出入いたされければ終に金子百疋だにも預りたる覺へなしさりととは不

思儀の言かけを申人哉と言は商人腹立し貴殿は大ちやくなる人かな我ら不断心やすく出入いたせはこそ大切な金子をしち物も取らす預置所に不届なる言分此方にはたしかなる證拠あり如何程返すまじとせらるゝとも其通りにて濟さやと此よし奉行所へ訴へければ則其富たる大商人召出され段々詮義あれば大商人申けるは私方へあのもの年久しく出入仕候得とも終に金^(32オ)子百疋でも預け置たる事無御座候是はまさしく申かけに御座候と申す時小商人懷中より一つの證文とり出し汝いか程争ふとも此手形に偽あらし則あのもの自筆にて御座候とて差上る奉行取上見て此證文は其方書たるかと富たる大商人に見せられしに此大商人畏り申上る様扱もふしきなる事のある物かな手跡は我か書たる物に紛れ御座なく候得とも此文章に於てはつゆ程も覺なし其上あのもの方より一金にても預りたる覺なきと申上る奉行聞て不届なる事を申もの哉誠に金子預らさるに^(32ウ)紛なくは此證文も偽りなりと申へきに手跡は我か書なれとも書たる覺なしとまきはしき申分なりと叱られける折から夕日決断所の西の方よりさし入かゝやきければ是にすかし見られしに紙にすぎ通て一字くゝに接合せたる物なりければ彼小商人をはたとにらみ汝すさまじき工みをしてあの者に言かけをなしける憎きやつめ夫縛て拷問せよと大に怒らる其勢に恐れ有のまゝに白状しけるは彼大商人の金子をむさ

ほり取らんと近頃工みかゝる手形を拵へたりと白状いたし謀書謀判の大罪にあたりけるとかや^(33オ)

評にいわく自分の書たるものはむさとすてましき事なり戦国の時敵の反間の謀にもかゝるためしある事也可慎く言かけに合たる男能書にて有ける故かの商人出入して其手を集め置字をつき合せ数年かゝり拵へたる手形なりされとも奉行の吟味に念入られさまくせんき致されけれど手きわ能き細工なれは見出しかたし折ふし夕日明らかにかゝやきけるに写しける紙に透通り一字くゝに接合せたる所あらわれけるとかや是天の昭明善人を助け給ふものならんか^(33ウ)

板倉政要後偏卷之三

目録

- 一 老人遺計を以幼子を恵む事
- 一 盗人行脚僧を殺し盗事
- 一 喧嘩相手大勢の中にて下手人を知る事
- 一 門に札を張盗人の事
- 一 唾を咄せて盗人を顕す事
- 一 蟠るを顕す智の事
- 一 刀を改め女殺本人を顕す事

(34オ)

(34ウ)

老人遺計を以幼子を恵む事

(三の二)

昔し都の町にある富商の老人一子もなく養子の娘に聾をと
りて暮しけるか六十に余り男子を獨りまふけ其母終に空し
くなりけりされとも手前よろしくらすものなれば乳母を
とりて養育しこの子三才の時老人重病を受けて今を限りと見
へし時おもふやうは我死して後は数多の財宝あらそひ是を
幼き者に任すべからすと思ひ親しき人を呼寄遺言を^(35オ)
書付させてことく財宝を娘にとらせ刀拾壹腰を此稚な
き子にあたへて此子拾五才になるならばこの刀渡すへしと
書置ける既に此子拾五才になりし時刀を請取へしと申せと
も聾渡さず少しの元手をわたし商人になすべしと父の遺言
なれば金子少ゝ遺わさんといふ此子合点せず奉行所へ願ひ
しかは則彼の娘と聾を召出され穿鑿のうへ遺言状など吟味
あり此娘心つよく悪しきものなり聾も又欲く深く賤しきも
のなるゆへ老人是をふかくかんかへ知つて若稚子を殺す事
もやあらんとまたは稚き者の^(35ウ)身として大分の宝をあ
たへ置たらんには必失なはんことを推量して娘と聾にあた
へ置きけれども真実はみな子に取らせたく思ひしものなり
それ刀は物を決断するものなりまた十五年と言置は其子智
恵才覚も十五にしては自ら事を計るに堪たり娘と聾此刀を
あたへずんば奉行所へ至り或はよき證拠明らかにして道理

を得させん為なり大欲不道の聾と娘養父の家督継へき人物
ならずとて財宝を残らず闕所せられてあらためてその財宝
を彼の稚きものに給りけるかゝる無道の娘聾或人のものと
も十年余飽まで喰ひ暖か^(36オ)に着ける事ひとへに養父不
思儀の大恩なりさりなからその子三歳より十五歳迄育し骨
折あれはその財宝の三分を上より下し給はる也とて別家と
なし給はりければさすかは聾娘の欲心ものも奉行のかしこ
き教誨に化せられて小児の家を本家とあがめともに栄へけ
るとなり

評にいわく老人の察智明らかなり欲深き聾娘に金銀財
宝を残らず譲り置かずんば三才の孤を何とて憐れみ育
ておくへき又財宝多く小児にあたへ置は終にはころさ
るへきを老人のかんがへ深く刀拾壹腰を^(36ウ)この子
に与たへ置此刀の一件遂には公訟と成奉行の明察にて
我宿意を申へきなりと奇策を遺せしものなり老人の志
慮も亦妙なる哉

盗人行脚僧を殺し盗事

(三の二)

昔し都の邊に壱人の旅坊主をころし衣服を脱取死骸を路の
傍に捨置きけるその所のもの驚き騒きて定めて此人数ころ
し狂人いまだ遠くへは行ましきと手分をして追かけよとて
四方へ追手を遣しけるに何とやら疑しき法花坊主壱人をと

らへ連れ来ればこの坊主申けるは^(37オ)此ころされける僧は我等かつれなりきのふの暮方より見失ひ所、方々と尋ぬる所に何のものか今こゝに殺し置さてく不便なる事哉と泪を流し誠にかなしき風情なり所のものも其分にはすましかたく奉行へ訟へける奉行かの連れなりと申坊主を召出し問て曰汝あのものゝ連にまきれなきかとありしにひけづらにてにくさけなる法師答けるは成程あのものは私相弟子の法花坊主にて古里よりはるく東國へ同道いたし罷出候處に不計昨日の暮より見失ひ方々を尋る所にかゝる仕合と申せば奉行は^(37ウ)さもあるへしさるにても汝いつの年より僧となりけるや剃髪せしや僧答ていわく七年の以前也と申奉行七年以前ならば七年の間読誦し習たらんそれくとして妙法花経八巻出されけるに此僧一字もよむ事あたはず今は事あらわれたりと恐れ二言となく自ら平伏しけり則此僧を高手小手にいましめて拷問せられしに此もの元来洛外の農家の子にて百姓をきらひ常に博打のみしてあふれものなりしか彼僧と同道して行ける路金ある事を伺知りて人なき所にて同道の僧を打ころし其殺されたる僧の^(38オ)衣服を我身に掩ひたくわへたる金子を奪とりわれと髪をそりて僧の躰となり人をころせしをかくさんと工みし也と白状せり明白成奉行の眼力のかれかたく終に白状して人殺の罪に行はれけるとかや

評にいわく所のもの言分のため何そうたかわしきと思ひし僧を捕へて来りしに此僧かへつて殺されし僧の連なりと偽れば皆人さもあるべき事に思ひけるに奉行の眼力明らかなる鏡のことくはやくも犯人の胸中を照しけるとかや^(38ウ)

又評にいわく奉行真の僧ならば経を讀と責られしは安宅の関にて弁慶の偽り山伏に勸進帳講せし富樫左衛門か事より思ひつかれしと也されは能などの遊び事もよく心得る時は大きな益あるべきなり

喧嘩相手大勢の中にて下手人を知る事 ^(二の三)

昔し都の邊にて船にのるものとも先番後番のあらそひ喧嘩して互に打合けるか壱人右の脇骨を打おられ死にけり此事船場役人より奉行所へ訟出ければ一座のものとも不残奉行の前へ召出されける所に何れも我くは手を出し^(39オ)申さゝるよし陳しける相手人を打殺せしものしれかねける所に奉行いかにもして本人を躰さんと謀をもつて申渡けるは定て此内に咎なきものもあまた有べきに角捕られたる事不便なる事ともなれは穿さくは又重ねての事にいたすべし先々このものどもに何にても食物を与へよと皆々なみ居させ食を喰せらるゝに其中に壱人左の手にて箸を持喰けるもの有ければ此ものをよくく見付置何れも喰畢て後かのも

の壱人を捕らへさせ人を打殺したるものは汝なり其子細をいかに^(39ウ)といふに殺されたるものは右の脇骨を打おられたれば左の手きゝたるものゝ打殺せしに紛れなしとやかて拷問に及ぶときはたして其左の手利たるもの相手に相違なきよし白状して罪に行なわれけるとこそ

評にいわく舩津頭の喧嘩争論なれば大勢の人数にて相手いつれと見分かたく一連不残捕て奉行所へ連来りしを奉行も弁へかたかりしか右脇の傷は是左手の利たるならんと明察ありし奇なるかな^(40オ)

門に札を張盗人の事

(三二の四)

昔し都の町に富貴なるものありしか蔵のうしろを切ぬかれ若干の財宝を盗取られ何ともすへきやうなく此事奉行へ穿鑿を願ける奉行此願を聞さまゝ盗人を詮儀ありしかどもその有家する事なし是に依て一つの珍らしき計を工夫せられひそかに紙札あまた拵らへ奉行の役人と謂るゝほとのも門にはらせけり其札の文にいわく我等同類と相ともに某か家の蔵を切り若干の財宝を盗取けるか上より御詮儀つよければ同類の内約束乱れ破れ終に此事あら^(40ウ)われんは必定なりされは今某し先非を悔心をあらため目あかしとなり出ん事を存す然れとも訟出はそのまゝ誅せられんの疑ひあり若拙者壱人の科を御ゆるしなされ候はゝ早速盗人とも

を訴人仕り可申と記し置けり一兩日すぎ則其脇へ札を立張添ていわくたとへ同類たりといふとも此事を告来らは其科をゆるし別に恩賞に金子下さるへきよし書付たり其後二日すぎひとりの男札のことく来り目あかしのもの某しなりと申をとらへて詮義ありしかは同類多く引出し右ぬすまれたる財宝もことゝく出^(41オ)けるとかや

評にいわく奉行の妙計凡智の及へきにあらず虚を以て実とし偽を以て真を得たる妙計の限なきものなるへし

唾を吐せて盗人を顕す事

(三二の五)

昔し都の町に富貴なる商人有けるか或時土蔵の鎖をあけ見るにいつしか数多財宝失けり此土蔵の鍵常々主じの腰に巾着付置て自身より外人る人もなきに是は不思議なる事也と此よし奉行へ訴へ詮儀を願奉行聞召し是は何とも合点のかぬは戸前より入て盗たるもの^(41ウ)にあらざれば窓より外に入る口なし人は窓より入へきやうなければ猿引などの猿を入て取らせたるものならんと推量せられ近邊の猿引とをもをことゝく召寄られ壱人つゝ前へ召出され様ゝ詮儀ありけれども盗人誰とも知れかたく見へし時に奉行思案せられ彼猿引ともを独ゝに手を披かせ其上唾を吐せて見られしに何れも唾をはきけるに其中に壱人口中かわきて良久しく唾なきものあり扱こそ身に覺へありて心せく故口中か

わきて唾出てさるものなりと則其猿引を捕らへ強く拷問し玉ふに果して^(42オ)奉行の推量の通り此もの盗み出せしに紛なく白状しけるにより御仕置に逢けるとなり

評にいわく即座にかゝる不思議の才智出る事凡人の業にあらず誠に掌上に唾はかせ見られし妙なる方便なり亦評にいわく内に顧て少しの悪事なければ其心平和にして氣血のめぐりよく自ら口中の潤もあるべき也奉行の詮儀ほとんど醫家と一般なるか

蟠るを顕す智の事

(三の六)

昔し都近き在所に式人の農家あり家をならべ^(42ウ)所を同じ行通い睦う連中なりけり独の東の家のもの禪六急に金子入用ありける故田地を書込に金子七拾両にし隣の百姓五郎八に借用いたし其後金子五拾両をかへしあと廿両は一兩日の内才覺いたし返還仕るせつ右の手形も受とるべしと日頃心易き故五拾両の受取もとらず帰りさて約束のことく残る廿両の金子を後日に持参して都合七拾両かへしければ手形を此方へ相かへし玉わるべきよし申せは西隣のもの申けるは七拾両の金を借して廿両にて済す法やあるとて以の外に言ける然れとも始め渡しける^(43オ)受取をとらねば都合七拾両渡したる証拠もなく又文籍を取返したるにもあらねは為へきやうもなく終に此事を奉行所へ訟けり依之双方召出

され詮儀あれとも東隣のもの慥に金子七拾両返済したるといふ証拠なくてすてに公事に負ければ東隣のものうき事に思ひ如何せんとおもひ壺つの訴状を認め又願申ければ奉行仰けるは何程其方なげき願ふとも其渡したる証拠なければ何とも詮義の種なししかし今暫く相まつへし我よろしく詮儀いたし得さすへしとて彼ものはかへされ捕方の^(43ウ)同心に申付て差紙壺通もたせ彼所の名主の家に遣し此所に海賊ある事すてに訴人あり是に依て海賊の本人同類を指ことあり何国の程にあるよしその隠れなしそき案内すべしと名主に辱せさせ海賊同類の家に入たり是他の家ならず則金子七十両を借したる西隣の百姓の家なり同心込入て目明しのおしへに随ひその家の亭主を高手小手にいましめ是非を言わせす奉行の前へ引居へける奉行申されけるは汝盗人の同類に紛れければその科遁るへからず少しも偽る事なかれと有ければ^(44オ)此百姓涙を流し申けるは某し山野の農夫と生れ櫓も梶も曾て手に取りたる事候はすいかて舩の上を住居とする海賊の同類ならん是は何ものか某しに怨恨あるもの、誣にてかゝる罪科を申かけたるものと覺ゆればあはれ其目明しと對決仰付られ下され候へと願ける其時奉行申されけるは汝何ほと争とも最はや其方か家を欠所して見けるに金銀絹布分限不相應あり是全く海賊の同類として物を預り置たるに非すや何そもし云わけの筋あらは一々に陳す

へきよし仰ければ爰に於て彼百姓誠にうれしく心^(44ウ)と
けて申けるは某しの家に米何拾石持けるはそん所何村の百
姓何某と申ものゝ預置し米也絹布何程は某し妻年中に織出
し絹なり金子七拾両は拙者東隣の某しと申もの質地を受た
る金子也其外海賊の預物杯と申もの夢くなき事也と明白
に滞所なく申ける奉行仰けるは汝海賊にはあらねとも如何
して東隣の百姓の金子を掠取るや則此ものにかへすへしと
て隠し置たる東隣の百姓を呼出し對面させければ恥しとも
恐しとも中々言葉に演かたくさしうつむひて罪に落にける
^(45オ)是に依て彼の借り状は取かへし東の家の夫にあたへ
西隣のもののその罪に依て彼金七十両公儀へ取上にせられけ
れは是より奉行所を恐れ正直ものとなり東西隣の好をむす
ひ永くむつましくともにさかへける

評にいわく東隣の農家十分の負にて悲しや金子すたり
と見へけるに西隣の百姓思ひかけなき難題を受け其言
訳に自ら実情をはき明らかなる公裁をうけて遂に東西
隣好を結ひし奉行の慈悲あゝ深きかな^(45ウ)

刀を改め女殺本人を顕す事

(三二の七)

昔し都の町に富貴なる商人の子あり年若くして然も美男な
り学文し詩など少し作りしかは嵯峨野の秋の千種の花をな
かめんとて行けるかあたりを見れば風流なる家あり其内に

形ち世に勝れたる二八はかりのいとなまめきたる娘あり立
寄て垣ま見けれども人を恥るともなき由にて有し程に此男
たわふれに秋のゝになまめき立る女郎花といひしかはかの
娘も少年の美麗に心をうつしけるにや打笑みたる体いなむ
さまならず見へければ少年弥こゝろ^(46オ)うかれて夜に入
てまたこそとはめとかたく娘は夕月のほのかなる比人め
を忍て戸のかけ金もはつし置今や来ると待居たりしに彼男
は来らずして今宵しもあれ所のわるものこの家に金銭ある
事を伺しりて盗とらんと入来て元より披たる妻戸なれば
安くと忍入彼娘の住けるねやまで来り財物を奪取らんと
思ひ探り出して娘の臥所近く来りける娘は盗人とは夢にも
知らず昼約束せし男と思ひ嬉しくて待かねたりといひなか
ら抱きつきければ盗人大に驚き生捕られたりと思へは刀を
抜き一刀に刺殺し^(46ウ)からき命助かりける事とてあわて
逃出けるか刀を落し己か身計り逃失けりかゝる所へ彼商人
の子さもあれ昼約束したる娘の待事もや有らんと思ひ忍ひ
来て娘のねやと見置し所に入やいなや娘の切られし血の上
をふみてすへりたをれて起上らんとせしか何やらん手にさ
わるもの有けりともし火は消てなし月のさし入かけにすか
し見るにかの娘の切殺されたる也只今切られしと思しくて
流るゝ血いまたあたゝかなり魂も身に添わす跡をも見す聲
も立てず己か宿へにけかへりける既に其夜明たれば^(47オ)

娘の親共驚きさわき先づ血の付たる足跡をしるへに彼商人の泊たる宿迄追来り此事先奉行所へ訴へければそのまゝ与力同心来りかの少年を捕らへ手かせ首かせ掛て既に拷問に及びしかは事の様有のまゝに陳ていか程責られても終に人殺したりとは屈服せざりける爰に於て奉行彼落し置ける刀をよく／＼見ければけだ物杯を料理する山刀にて商人の子のやさ男の佩へき刀にあらす是に依て其邊の百姓とも召出され此度御尋の山刀有るにより汝等持傳たる刀とも持参すへしと申渡されければ我も／＼と^(47ウ)持来る刀とも奉行一々見られ銘々へ返しさて其内彼一腰を抜て此刀の主し知れされは此主はなきかと問はれける皆／＼打寄吟味しけるかその中に此刀見知りたるもの有て是は鹿谷の弾次兵衛か刀なりと言を聞届やかて鹿谷へ捕方を遣はし召捕らんとせしに弾次兵衛早くも知りてとくに逃けり扱すへきやうなかりしに奉行一計を案し出され彼商人の子を縛り嵯峨邊所々を引廻し先達而娘を殺し財宝を盗取たる商人の子刑罰せらるゝとふれ廻し扱その夜人殺の仕置濟たりと披露ありけり彼逃失たる盗人^(48オ)此事を聞今は心安しと思ひ我宿へ帰りさわらぬ体にて居たる所をやかて捕らへて拷問しければ娘を殺したる事有のまゝに白状しければ終に罪に行われける彼商人の子は夜中に人の内へ忍び入り娘と密通せんとせし科ありといへとも少年の色を好む情をあわれみ御慈悲を

以てその罪を御免し親元へかへされ以後急度慎て親に孝行をせよ一度悪事をせんと志す時は是親の為なりと恐れてはやく悪心を改め一度善事をなさんと志ば是親の為なりと思ひその善事を遂けなすべしと教られければ大に好色の^(48ウ)心を改め孝行人と成たりとぞ

評にいわく商人の子色にまよひ大なる難儀をいたしける奉行の明智にて危難を逃れ聖賢の教をうけ孝行人となりたる賢を以色に易しとやいふべけん

板倉政要後偏卷之三 終

板倉政要後偏卷之四

目録

- 一 大欲も無欲となる御慈悲の捌の事
- 一 鞆を検して人殺の犯人を知る事
- 一 馬を發して鞍の有家を求む事
- 一 百歳迄古主の命を預りし事
- 一 化ものとなりて密夫通ふ事
- 一 金を捨て普く披露する事

(49オ)
(49ウ)

(50オ)
(50ウ)

板倉政要後偏卷之四

大欲も無欲となる御慈悲の捌の事

(四の一)

昔し都の町に富貴なる商人ありしか兄弟の男子あり兄は春太病者にて不斷遊ひて世事にかまわす弟は夏二とて健にて商ひのさしひき由断なく働けるか或時親父頓死いたしけるゆへ何の遺言も申置す是に依て式ケ所の家屋敷有金貳千兩の余はある所兄弟あらそひ兄は弟を追出し惣領なれば我此跡を取んといふ弟は兄は病身にて不斷あそひ暮し商の事は不構^(51オ) 我骨をくだきて持き出したる身上なれば中々兄へは渡すまじきと互に跡式争ひやまねば町内年寄どもさまくあつらへとも両方言募りて合点せす是非なく此事奉行所へ訟る所に奉行聞れて兄弟のものを呼出され汝等兩人ともに仁義をしらさる非道ものなり唐こしには父死して兄弟國を譲りて互にとらざるためしさへあるに左様に道をは知らずとも兄は弟をあわれみ弟は兄を敬ふ事を忘れて父の遺跡を我まゝに奪取んと争ふ事言語同断の非義なりとて大に立腹あり則兩人ともに^(51ウ) 牢舎申付られ屋敷家財封印付て町中え預になり兄弟は一所に牢舎の身となり百日はかりも何の沙汰もなかりければある夕へに兄泪をこほし申けるは親となり子となり兄となり弟となるも前世の宿縁浅からさると聞及しに互に意趣も恨もなき事なるに兄弟かやうに讎敵となるのみならず斯るうき目にあふうへ親の命日に

でも香花をも供せず不孝のものと世の取沙汰に及び現世後生の冥罪の程も恐ろしき次第にあらずや抑も此公事の起しは二ヶ所の家と有金貳千兩余を独して取へき大欲より^(52オ) 起りたり然るに此体にて永く牢舎せは何時相果へきも知れかたし其上空しく親の遺跡を他人の手へ渡しけんも口惜かるへしいさ家も一ヶ所宛金子も二つに分け取にせんに誰違乱いふものあらし殊に我等は病身なれば妻持へき願ひもなく極て其方より先立身なりさあれば其方を頼まねはならず前非を悔てしほくと語りければ夏次も流石骨肉をわけたる弟なれば落涙して始て和談し度願をいたしければ奉行前え召出し兄弟心を合て親の名跡相續仕度よし願尤也とて町役のものども召出され申渡^(52ウ) けるは惣して少欲なれば足事を知る事を知るを以て福者となつたとひ千万の金銀を持ても足る事知らざるは貪者なり此兩人のものともし百日の牢舎の内同心の学問あるものをして忠孝の道を日々説聞せしかはその修行に依て此道理を悟りたると見たり弥此後兄弟孝行の道を守り心を合て親の名跡相續仕れと命せられければ何れも有かたく御前を立にけり

評にいわく奉行の明智に大欲の兄弟廉潔変せしは盜跖をして伯夷叔齋のこときものと^(53オ) なしたる是そ古

今に秀し有司と称すへし

鞆を検して人殺の犯人を知る事

(四の二)

昔し都の町に鄙通ひする商人ありしか買ものありとて金子五十両もち近江の國某村湊内の方へ行とて出けるか道にて何ものか切殺しけん懷中の金子を奪取て死骸を捨置きけりこのもの妻子兄弟大になけき是は外のもの、仕業にては有まし定めて懷中したる金を取んため隣むらの某か殺したるへしと此ものを疑ひ此由奉行へ願ひけるは則隣村の某し召出され此事詮義されけれども某夢、此事存し^(53ウ) 奉らす其上此ものは年久しく馴染にて兄弟同意に語りあひいつも野道を帰り候時は人里送り届申候此度は私方へは来り申さすと申上る是に依て奉行しはらく思案あり殺されたるもの、兄弟を御前へ召され問はれるは人をころし金を取る事なれば定て心せきて何ぞ落し置たるものはなきかと尋ければ兄答て申は刀の鞆を一つ落し置たりと申上る則此鞆を取寄て見らるゝに下手の拵へたる物にあらず手きわ見事にて上手の細工なれば近邊の刀の鞆の細工人共を多勢召し寄せ見せられければ^(54オ) 其中に壹人進み出て申けるは此鞆は三条通鞆師修理せん所その某しと申もの作りたる鞆也と申により早速此もの召し出され詮義あれば此もの承り是は成程わたくし拵たる鞆にて候か去年の春何村の何某と申百姓強藏賣渡し申候よし聞かれ則その百姓を召捕て詮義のうへ拷問に及びて此もの人殺し金子奪取し事の様子白状申

ければ盗人人殺し重罪の科人なれば重き仕置となりけるとかや

評にいわく奉行の何ぞ盜賊の落せし物はなきかと問しに鞆を落したるより事^(54ウ) 顕れけりしかし是又天然の偶然なり若し此鞆も落さす假令おとしたるとも近邊のもの、作りたる鞆にてあらずんば如何して此盗人あらわれんやされとも奉行あわれみ深くまことを以て詮儀ありしゆへ天道に叶ひ本人を得て科なき人は難をのかれけるとなり

馬を發て鞍の有家を求る事

(四の三)

昔し都近邊に富たる百姓ありけるか鞍置きながら馬を失ひけり三日尋れども知れさりけり此事を訟申せしかは奉行聞て此盗人の詮義^(55オ) 甚だ厳しかりしかは盗人頓て其馬を其夜はなし返して鞍はかり滞て歸へさゝりけり此よしを又訟しかは奉行きゝて是すなはち知りやすき事也とて申付如此ゝと教ければ馬の主其教のことく彼馬の歸へりしより馬草をも糠をも飼はすして鎌をとき捨て、夜中に追はなし其跡に付てしたひ行き見れば昨夜物喰せし小百姓の家にたゝちにいたりけり其夜に入てこゝかしこ尋ねしかは草を多くつみける其下に彼くらを隠し置けるより家主を取らへて召連れ出てければ則牢舎し詮議^(55ウ) のうへ所はらひと

なりしとなり

評にいわく老馬の知を借て道を察したる奉行の明智称すへきに非や

百歳迄古主の命を預りし事

(四の四)

むかし都の町に春米商賣して上下九人榮くと暮すものありしに此ものゝ家に火札を張置けり町のもの見付驚き讀て見るに道有とたしかに書付有りしかは此段奉行所へ訟へしかはその春米屋徳兵衛招呼れて詮義ありしに此道有と申ものは私古主にて則隣町に借宅仕罷在る由申上れば即座に道有を召出され^(56オ)名判を居へて火札を張事は珍しき事なり其方いかなる事ゆへ火札をば張けるぞと尋ねあれば道有申せしは私儀は親代より米商賣いたし申候所に年罷寄り其上病身に付商賣成かたく元より妻子も御座なく家を賣拂ひ申候金子にて独貧を樂み暮し一生終り申へく覺悟を極め十六年以前に法体仕り小借屋を借り引籠り當年七拾五歳に罷成候此米屋の某と申ものは十才より召使ひ三拾五才に罷成候時米屋商賣のときい白舛かけまで相添へ仕似せの見世をゆづり置候得は段々^(56ウ)持いたし只今は屋敷を求め一家は九人暮し罷在候然るに私三年前に盜賊に逢ひ余處なき金銀衣類迄不残取られ飢に及候得とも外に頼むべき親類も御座なくゆへ此もの方へ折々合力を頼み申候所に度々の無

心罷ならずと惡口仕るのみならず剩さへ打擲に及申仕合に付不届にそんじせめての無念ばらしに火札を張無念をはらし申迄に心ざし真実に火をつけ申心底にて御座なく候ゆへ私名を書付候よし答ふ奉行聞て先以此もの不忠不義なる仕方幼少よりかひ立られ今大勢の人を養ふ事偏に^(57オ)道有か恩なれば主と親との恵みを蒙りながら七拾五歳の身明日をも知らぬ道有壱人の露命を世話にせましとて火あぶりのそにんに出るは非道千萬なり拾才より三拾五歳まで廿五年の厚恩あれば今日より道有を廿五年養ふへし去なから道有事は火付同前の科人なれば宥免なりかたし廿五年過て急度曲事に申付る間町のもの随分念を入れ煩わぬやうに大事にいたし置くへしと申付られしとかや

評にいわく慈悲なる捌なり米屋の何某^(57ウ)幼少より飼立られ厚恩を受たる主人しかも明日をも知らぬ老人の露命を世話にいたしかね主人を訴人に出る程のものなれば預られてもよもや扶はいたすまじとみるに依て町のうちの年寄共を御前に召され大切なる囚人なりと仰に貳拾五年の間煩わぬやうに大事に仕つれと仰付られしは道有を麓末にいたさせまじきとの思召誠に有かたき仁慈なりと皆人申けるとかや

化ものとなりて密夫通ふ事

(58オ) (四の五)

昔し都の町に二三年此方化物出ると言習はし人の住ぬ古家あり或時西国かたより来る浪人篠塚伊賀右衛門と云勇力の士此屋敷借求め度よし申せは家主右の様子を語り幾人か此家に住しもの十日と尻の居るものなし御無用といふを是非と望て移りけるか一兩日あやしき事なき所に或る夜丑の刻はかりに両隣の表の扉を飛越るを見るに白き装束にて髪をさはき眼を丸く光り女の幽霊など、申へき体相のもの見へければ折ふし亭主起き合ひかねて用意の手鎖を持て走るか、つて突落しと、め迄さして化物は仕とめたり(58ウ)と家主名主町内へ断言へは皆く立合見物いたしけるに美しき女の形年は廿七八と見へ両眼に銭三文はり付乱髪に湯方を着し朱に成て突伏せられけるを能くく心を付て見れば隣の作酒屋の若後家なり所のものとも肝をつぶし此事内證にては濟まじと急ぎ奉行所へ罷出右の段、申上ければ奉行聞れ所のものとも呼出され穿義あそばされけれども何とも様子知れかたき所に奉行しはらく思案され浪人の住又隣は何ものそと問れける所のものうけ玉はり東隣に罷在るは野良上りの染助と申小間もの(59オ)賣當年廿八九の若男獨住の暮し五六年も罷在候と申に付此もの呼出され仰けるは汝じ後家か化物のすかたになりたる様子存ずへし包ます申上よとあれば此ものうけ玉わり私町内に罷越五六年も渡世仕

候得とも後家と近付に罷なり候事御座なく候何とも此儀は

存し奉らすと申上る時に奉行其方何程かくすとも此後家汝と蜜通したるに紛なしと後家の家主を召され後家の手道具何によらず不残持参仕るへきよしにて則前へ取寄せ其内を詮義有けるに鉢箱より右小間物うりの起證文(59ウ)壹通其外取替したる艶手数余多出けるより此ものを取らへ詮義しければ五年以前彼女と密通したるなり初より夜更て化物となり扉をのりこへ女方より忍びける事をその夫此よし推量しけるをうるさく思ひ鰥のてうをひそかに食物の内に入て夫にす、め責殺し後家となりてはいよく私と永く契りしなりと拷問のうへ不残白状して終に仕置に合けるとかや

評にいわく奸夫淫婦の責にあひて良男子の命を殞する事おほし恐るへきは婦人なりく

亦評にいわく戯場の役者いつれも淫乱にして(60オ)よく婦人女子を迷はすそれにつきては小間物賣またよく女子に近よりて終には不義放埒をなすかりにも婦人女子には戯場などはみすましき事なり

金を捨て普く披露する事

(四の六)

昔し都の下立賣にて金子貳百兩拾ふものあり則所に張帟をしていわく去る十六日下立賣にて金子貳百兩拾ひとり申候落し主御座候は、御出有べし負数包みの品改可申候以上

二条通りと張紙いたしけるを落し主実藏見て大に悦び早速酒肴など用意し右の金子を貰に行けるに^(60ウ) 拾ひたる主申は大部分の金子を落されて嘸なんきたるべし是に依て内、五拾両はかり合力のため返すべしと申せは落し主実藏此由を聞て是は迷惑此金子去御屋敷へ濟さねばなりかたき金子なり御慈悲にのこらす返し下さるべし御礼は急度仕るべく候間此段御聞届下さるべしと色ゝいへとも拾ひ主申は濟さねは叶はぬとある大切の金をなぜにむさと落されしそ一旦落せしうへは五拾も此方心入を以て貴殿へ合力申にのこらす返せとは我まゝ千萬なる云分此上は壹両にても返す事なるまじと申切は是非なく此事を^(61オ) 奉行所へ訟して右の金子返し候様に願申せば奉行聞て拾ひ主忠兵衛を召出され其方は金子貳百両拾ひ取返さぬ覚悟ならは何として所へ張札出しけるそと尋らる時に忠兵衛答けるは私儀以前は小知行をも取り罷在候処不慮に浪人いたし縁類古傍輩とも合力も永くの事ゆへ申うけかたく年々の煙りたてかね候所に今度存しよらす金を拾ひ申事天のあたへ玉ふ所いまた冥利に尽ざる仕合と奉存候右の借金かい懸り等拂ひ申へき覚悟に御座候得共昨日今日まで隠れなきすり切浪人か俄に大部分の金を取りあつかひ^(61ウ) いたし候は、家主をはじめ金子拾ひ取たるとは申さず盗みいたすか又は博奕などの非道なる金子か杯と疑申され候は、一分すたり申とそんし慥か

に拾ひたる事を諸人に披露仕りたく扱こそ落主を吟味仕候夫ゆへ張紙にも落主へ金子相渡申へくとは書付申さすと申上れば奉行や、暫く思案されいかにも尤なる申分なりとて落主実藏へ申されけるは其方落せしにまかひなくはあのも拾ひても隠密にいたし置かば汝損にいたすへきより外なし兎角これはひろひ主出ぬ昔しと存あきらめ立ませいとの下知実藏はぜひなく^(62オ) 泪をこぼしすこゝと退けり其後密に彼浪人の筋目を僉義ありしに占主を諫て身退し趣分明なりければ奉行その占主へ言葉を添られ本知三百石にて召返され西國大名へ身上相すみけり其後尅年あまりありて彼落主実藏の方へ忠兵衛先年の礼なりとて金子三百両樽肴女房方へ金百両絹綿相添遣はしける奉行日鏡にて彼浪人勝れて才覚あるものと世話ありしに果して旧日の恩を忘れす厚く謝たる事皆これ奉行よく人をするの鑑ありとて称るなり

板倉政要後偏卷之四 終

(62ウ)

板倉政要後偏卷之五

目錄

- 一 理非分明に主従を捌事
- 一 言葉を工て密通を顕す事
- 一 跡目を論る瓢單公事

一 眼前の無欲善惡の鏡の事

(63オ)

(63ウ)

板倉政要後偏卷之五

理非分明に主従を捌事

(五の二)

昔し都の近郷に同苗同性の百性有けり。壺人は権次兵衛、その家福貴にして上下廿人も暮し。今壺人は権太兵衛とて親代より貧家なりしか別して、今の百性纔父子四人口を暮しかね一家のよしみ有とて福貴なる百性のかたへ来り無心を云けるに、節々の事ゆへ合点せず。毎度用に立たる金、また返済もなく又候あつかましく来られし杯といふて面目を失なはせければ、貧なる百性無念^(64オ)に思ひ何れ汝か主筋なれとも時世とて貧に暮せばこそ斯る口をしき事をも聞け。此上一つの計こそあれとて所の名主へ行て申やう。何村の何某は拙者家来すじなれとも様子ありて、今迄は其分にさし置けるか。向後付合に上下も着せましく殊に門構の家推参なり。是をこわし候様に仰付らるべしといへば、名主分をき、只今迄は貴殿とあのものは近き一家のやうに承り候所主と家来とへだて候よし一應あのものにも承りいよく家来にまきれなく候は、仰のことく門をもこわさせ上下をも着せ候ましといふて^(64ウ)夫より福貴なる百性を呼て右の様子を申せば、此百性立腹し推参なる事を申すものかな。我等は惣領すじあのも

の末子の分れなり。彼か親代より貧に暮らすを不便に存し、余程の金子を取り替へ置所に其恩を忘れ我を家来すじ杯と申事不届なる言分と互に此事言つのり内證にて埒明ねば、此よし奉行所へ訴けるに、双方召出され僉儀あれば、壺人の百性は彼こそ拙者か家来すじといへば、我等は惣領すじに紛れなし。汝こそ末子の分れなり。互に聲高になりけるか。貧なる百性こらへ兼白洲の石をとり福貴なる百性のみけんに^(65オ)打付れは何も驚き両方へ押分けり奉行仰られけるは、我まへをもはゞからず立騒さへあるにきづ付る事不届なり。あのも急度牢舎申付べしなれとも慈悲をもつて所の名主へあつけ返す間、双方罷立と叱られけりかくて、壹年余も何の沙汰もなかりし所に所のものとも取沙汰にも預られし百性は主すじにまきれなきよし申けるを福貴なる百性聞て口惜しくや思ひけん。又奉行所へ願申けるは、私儀同村の某と申ものと同名にて定紋も同く五七の桐を付申所私を家来すじと申去年八月二日双方御前へ召出され^(65ウ)せんさくの上白洲にて口論に及び私か額に疵を付申候故所の名主へ御預け遊はされ候然る處頃日同村のものとも打寄私を家来すじに紛れなきなど、とり沙汰仕候よし承り候私は然も惣領すじに御座候間、此段取沙汰不仕候様に仰付られ被下候様奉願候と申せば、此よし聞て去年名主中へ預の百性めし出され去年汝に申付しを守らすとかくあのを家来なりと取沙汰仕候段不届の

至りなり尤家来なりと申たしかなる證拠ありやと尋るに名主承りて申上るは御意の通り比儀は仰渡されしより内證にて家来と申(66オ) たしかなる證拠有やと吟味仕候へとも両方に證拠御座なく候ゆへ其後は何のさたも御座なく候と申上る時に富貴なる百姓申けるは其方にて何の取沙汰もいたさざるに所のものども我等を家来すじなりと風聞いたすべきやうなし毎度よりも名主一所に罷成私をせびらかし申候此儀は急度仰付られ下さるべしと申上る時に奉行仰られしは然らば汝じあのも、家来すじに紛なし急度あの者を主とうやもふべしとの申付に富貴なる百姓おどろき是は何とも迷惑に奉存る家来と申たしかなる證拠もなきに主人と敬ひ申事叶ふ(66ウ) まじきと申上る其時奉行仰られしは去年既に其方家来すじとはたしかに知れたり其證拠はあのもの其方を何とも思はず石を以て打付し也汝も主すじと思へばこそ是をかんにんして今迄は居たり其上所のものとも取沙汰に何程我を家来なりといふとも元より家来すじにあらされば心にも懸るまじ殊に名主に向てもかのものと一所に私をせびらかし申杯と言へは主人とあかめたる申分なり夫ゆへ汝を家来とは申なり向後あのものに慮外かましき儀仕るなと理非分明に御捌有ければ何れも言葉なく罷出けると(67オ) かや

評にいわく此公事両方にたしかなる證拠はなけれとも

先祖より貧なる百姓は惣領すじと相見へ諸事付合にも上座になほりけるか近年貧にして何事も福貴なる百姓の下座になりたれど聞つたへに我は惣領すじといふ事を知りて居けるか金銀の無心などいふゆへに座をもあらためず年月を送りける所に此度金子を借さる恨により急度改けるものなりと奉行の明察感するも余りありけり(67ウ)

言葉を工て密通を顕す事

(五の二)

昔し都の町に若太郎といへる商人あり同町より丈内といふもの、娘を迎へ妻とし五六年も暮しけるに或る時女房よしのたもとより文を落せしを密に披見るに互にあて名は書きりけるか深いひかわし年月むつましくしたる文牒なればその商人大にいきりよく、氣をつけ見るに日頃出入する古の手習友達の筆藏と云もの、手跡に紛れなければ扱は此男と我等か女房と密通して居けるを知らて今までうかくと暮せし事の口惜しやと思ひ何とぞして是を見あら(68オ) はし度と心を付けけれとも此文落せしよりは密通の男心付けるにや其後は音信もせさりけるゆへに女房は密夫に逢ふ事遠さかりけるを恨みさま／＼亭主に不足をいふて隙を取んと工みけれども亭主も右の分有ゆへに中々隙を出さざりけり或時に女房と争論し此文の事に及び密通を穿さくしける

を女房以外の外なる難題を云懸られ女の一分たちかたしと此事互に言募り已に奉行所へ申上しかは右の卯之助召出されかの艶書を見せられ是は汝か書たる文通真実に申上へし少しも偽におひては拷問いたしいわす^(68ウ)べしとの御意此男畏り申やう是は存しかけなき無実を承るものかな私方へ金子の無心申候得ともなるまじきよし申候に付かゝる無実を申候得ば其恨み晴さんと私手跡を似せ候て申かけしと覺へ候元よりあのものは私手習朋輩の然も兄弟子にて御座候ゆへ私筆跡を似せ候段まきれ御座なく候急度此儀は御詮儀下され候は、有かたく存し奉るべきよし申上る奉行聞て尤其方に恨みあつて罪に落すへき工み似せ筆いたすとも女房に何のうらみあつて無実を申かくへきやいつれ此文の筆者の真偽くはしく吟味とぐる内卯之助も女も^(69オ)牢舎申付るとてさま／＼拷問いたされけれども兩人ながら弥口堅く落さりければ半年余の牢舎にしたいに堅なり我／＼無実の罪に沈む因果の程口惜しき事と申て中々密通いたしたるとは申さざりけり是に依て兩人ながら出牢申付られ若太郎を又牢へ入れ拷問すべきよし申渡されさて奉行女房よし呼出し申されけるは其方何程かくすとも卯之助は最早蜜通を白状いたしたり汝もつゝまず白状いたさば兩人共に命を扶くべし少しも偽ず申上よとありければ女承り男は血に迷ひ有らぬ事申上るとも私は^(69ウ)不儀仕たる覺へ御座なく候間

いか程うき目に逢ひ申ともえこそ左様には申まじきといへば然らば其方命はたすけかたしと仰られ其後男を召出され汝じ無実の罪に沈みさぞ難儀たるべし依て明日命を扶け帰すなり夫に付其方へ申事あり明日汝が一家どもへ向て此度私一命を御助け遊はされしこと密通の次第不残白状いたしけるゆへ遁れかたき命を助り罷歸る是偏に殿の御慈悲ゆへなりと申立べし其方不儀は致さゝれとも今まで牢舎云付たる奉行の眼力違たるなど、諸人に批判云れては我か役儀立かたき故かくは^(70オ)申付るなり若し此儀立がたき故合点不仕は何つまでも牢を出さす事なるまじきの御意に此男かしこまり何かさて御前の御意は相背き申まじ仰の通り申ふらすべしと云へば則此もの親類ともを召し出され彼ものか命助け今日相渡し候間受取に来るべしと仰渡され斯て其日になれば白洲に一座のもの残らすめし出され親類とも相詰ける所に彼男を召出され縄をとき助けられければ此もの心うれしく奉行の仰付られし通に申ければ彼密通したる女房よしかたはらに聞居て大に腹立してこな男畜生め^(70ウ)かくまで申替せし事をやうも白状いたしけるよな我は女ながらも云替せし事を忘れずさま／＼うき目を見るといへとも今まで白状いたさざるに恨めしき男と云て泣出せしより事頭れ終に密夫の刑に逢ひけるとなり

評にいわく様々の拷問さへ何とも思はざりける肝のふ

とき男女と云とも天罰遁れず終に仕置に逢ひける是奉
行の奇計ゆへ顕れけるこそ恐ろしけれ

跡目を論る瓢單公事

(五の三)

昔し都の町に金銀数多もち世に長者といわる、^(71オ)程の
榮翁といへる老人ありけるか前腹に男子壱人後妻に男子貳
人女子壱人都合四人の子供あり後妻思ふは何とぞして我産
出せし三人の子の内に名跡をつかせたく思ふ折ふし老人の
機嫌を見ていふやうは惣領はこゝろ短氣にして此家を納む
へき器量にあらず弟貳人の内に跡を相續させ玉へ夫も御心
に入申さず候は、末子の娘の聲は心やさしきものなれば是
に家をつかせ残三人へ相應に金子を分与へ玉へ杯と物語り
するを老人兎角の挨拶もなく我存寄是あると云て打過ける
か不計煩ひ出し今は死すべく思ひけるにや四人の子供^(71ウ)
を枕元へ呼て申やう我死すとも必く跡をあらそふ事なか
れと懷中より此瓢單を四つ出し我死後にいたり此瓢單を奉
行所へ持行くへし然れば御前より家續するもの御差圖ある
へし今迄の通りに母を大切にしてい兄弟むつまじくて子孫永
く繁昌すべしと云て瓢單四つを兄弟四人へ分与へける何も
是は合点いかねとも親の遺言に任せ死後に及て奉行所へ罷
出瓢單を何も持参して右遺言の趣を申上しかば奉行もあぐ
ませ玉ふ右四つの瓢單をさま／＼吟味あれとも書置らしき

ものの中にも見へず色ゝ志慮を勞せられてもこの^(72オ)儀合
点いかねとも汝等今日は罷歸り重て此方より呼出すべしと
返され其後さま／＼工夫ありて漸く發明ありて右のものと
も召出され白洲に板を敷四人持たる瓢單を一／＼立てさせ
見られしに前腹の惣領の持たる瓢單しりすわりて立けり後
妻の子三人の瓢單はころ／＼とところひけり則其立たる瓢單
を持参りしもの家相續仕れと申渡されける依て何れも殿の
御智のほどを感じ御前を罷立けると也

評にいわく子を見る事親にしかずと古人も言へり老人
も智ありて奉行發明なる^(72ウ)事を悟りて此瓢單を遺
したるよく孤を瓢單に託したるものとやいはん

眼前の無欲善惡の鏡の事

(五の四)

昔し都の町に職人ありしか彼か子五才になりけるか隣の三
才になる子と喧嘩して槌をもち天窓を打ければ五才の子忽
ち死しけり職人大に腹を立東西知らすの子ともに槌をもた
せし親の心の悪しければ是非に下手人に三才の子をとるべ
しと怒りければ三才の子親は手前宜しきものゆへ是をかな
しみ金銀を出たし人を頼みてさま／＼わびけれども此職人
かんにんせず已に^(73オ)奉行所へ訟しかは双方召出され詮
義のうへ仰られしは汝か子より幼少なるものに殺さるゝ事
前生の因果と思ひ明らかめ跡弔ひて得させよと御意職人涙を

流し是は御情なき仰かな尤悴は何の弁へも御座あるましく候得共其弁へのなき子に槌を持たせし親の心悪く候間是非に敵を御取下さるべしと申三才の子の親申上しは全く悴に金つちを預け申さす候彼ものゝ悴か持居たる鎚を奪ひあひての儀に御座候跡弔ひ申候金子はいか程も望次第才覺いたし差出し申へく候間御慈悲に堪忍仕候様に仰付られ下され(73ウ)候は、有かたく存し奉り候と泪をこぼし申上る奉行も互の心入をさつし暫らく言葉も出ささりしかやゝあつて仰けるは汝か申所尤なり双方明日罷出べし去りながら兩人ともによく聞べし明日は土團子と米の團子と出し置きその三才の子にとらすべし若し土の團子を取らば命を助くべし米の團子を取る時は其方願の通り敵を取て得さすべしと仰付られしかば三才の子の親宿へ帰ると土の團子と米の團子をこしらへ米の團子を取るな土の團子をとるべしと様々言含め夫婦ともに早朝より彼の米の團子と土の(74オ)團子を白砂まで持出て必らす米の團子を取るなど言教しへ既に御前へ彼子を召出されて米の團子と土の團子と取出されしかば何もかたずを吞て見居たりしか此子御前へ出るまで言教へたる土の團子を取らて米の團子を取ければ二親はつと思ひける所に奉行仰せけるはあれを見よ今米の團子を取らは殺さるゝと云事聞ながら土の團子を取らぬなり然れは何のぐわんぜもなき子なりもし土の團子を取る時は心弁へあれ

は扶け置れず右の通り能く考へあの悴か命を助けよ其替りに金子五拾両差出し急(75ウ)度詫仕れ町内のものとも此儀よろしく取扱べしと仰ければ何れもあつと御請を申て御前を罷立けるとなり

評にいわく奉行慈悲深き裁断心人よく人情を弁へ知られたりと云べし小児に土の團子と餅とを見せたるに小児の親とも昨夜よりよく土の團子をとれと教たれとも小児餅を見るより何の弁へもなく是を取りり両親かなしく思ひける所に存の外なる御意恩赦を得て皆人感涙を流しける是奉行の仁恵なるものなり(76オ)

板倉政要後偏卷之五終

(76ウ)

板倉政要後偏卷之六

目録

- 一 盗人同類を以て父子と偽る事
- 一 金を石とし石を金に化する事
- 一 捷智に顕る二道の女の事
- 一 家来主人となり主人家来となる事
- 一 欲には義を忘るゝ同商賣の事
- 一 痘瘡を病し双鬢の給金の事

(第一冊 1オ)

(1ウ)

盗人同類を以て父子と偽る事

(二六の二)

昔し都の町はつれを夜に入女独通りけるを盗人とらへて衣裳をはきとらんとしけるを人殺しよと呼わりける折ふし通り合せたるもの盗人をとらへ女を助けかへしける盗人はとらへたる男を追はぎよといふ男肝をつぶしおのれこそ盗人よと互にあらそひ居る内に人大勢来かゝり判断するに何れ盗人ともきわめ難しいつれにも此兩人の内追剥ならんとて兩人ともに召連て奉行所へ来り右の段を申^(2オ) 上げる時に兩人なから白砂に同じ様に直させ給ひてしはらく有てもひよらすやひ盗人めとつきき御言葉を掛けられければ一人は押しうつむく今一人は何心なき牀にて居ければ俯伏せしを捕て汝盗賊の覚あればこそ承伏し体を顕したり一人は身に覺なければ自若として畏れたる体なしとて詮義ありければ^〱此うつむきしもの追剥にきわまりけるにそ神明態にて皆人感じけるさて此盗人の宿を詮義しけるに親ありけるを召出され仰られけるは己か忤盗人となるを何とて異見はせぬぞと御意に親申けるは盗人をしてなりとも榮くと我を養へ^(2ウ)と日頃申付しといふ又忤か申は何とて親の身として盗をして頭を切れと申や候はんさにては御座な候此身のいたづらより盗をいたせしと申上る其時奉行思案いたされ一旦父子のものを白砂より退け暫らくありて先

親を召されて仰られけるは忤を只今拷問する所実の父子ならずと有のまゝに申たり又己か口を聞んため召出す少しも偽らば拷問いたすべしと仰ければ親父承りもはや忤か白状のうへは是非もなし成程実の子にては御座なく候元他人にて候へとも御詮義の時は父子と申て父は子を思ふ事の深き心さしをあらわし^(3オ) 子は父に孝行の厚き心ばへをいつはりて科をも遁れんためにて世に御慈悲深きと取沙汰仕る御奉行なれば扱も氣どくなる者どもと御覧して御褒美にも預らんと兩人して工みたる事をのこらす白状いたしけるにその後子をも親か白状せしよしにて詮義なされければ是も同じく白状し実の父子にてはなかりけり仁道正して奉行を愚人の身としてさみしける天罪にて終に悪事顕て廿里四方を追放なりとかや

評にいわく実に肝のふとき盗人かな己れ追剥をして世を渡りなから返て御奉行を^(3ウ) 欺き奉り世の賢人ともいわひ御褒に預らん杯とは片はらいたき愚人ともかな打首にもなるへきを御慈悲にて追放なされけるこそ有かたき事かなと世人感しけるとそ

亦評にいわく兩人一時に穿鑿する時は実事知れかたし先引わけて一人つゝを糺し其上にて一所に照し應て尋問ときは実事分明なり

金を石とし石を金に化する事

(二六の二)

昔し都の町に有福なる茶屋義兵衛といへる商人兄弟三人の男子を持ち三番目の弟を隣町の綿問屋信兵衛養子にもらひ度よし云込けるに早速^(一オ)同心して金子百両乳母壺人相添て遣しける所に此子拾壺才の時綿屋の何かし四拾余にて女房始て懐胎して男子を産けり老後の子なれはとて夫婦寵愛限りなく悦ひけり女房常に思ふは養子なくんは今出生の男子惣領たるべきに早まりて家の嫡子も二男となりぬる事本意なくとくやしき色外にあらはるゝに付ては自然と養子は疎ましくなり衣食に付ても頃日目たつ計なるを乳母も口惜しく実父に此よしを告げける事度ゝなりしかは実父も女房に内談して我れ人の情よく替る事有ましき世間のならひ何さま養子と^(四ウ)実子とならべてはいつくしみ実子には紛るべからずは無理にはあらず夫に付ては代ゝの家督を実子を差置養子に譲る事快よかるまし義理を思へは今我子を帰さんとはいひかたかるべし取返したる上に相應の事あるましきものにあらず綿問屋の何かし方へひそかに取戻し申へき相談いたしかけぬるに此人大に立腹して壺度養子ともらひ惣領に立しうへは假令実子拾人式拾人出生したればとて不深切の義毛頭是なし今実子あれば某し思案も替るべきと思はれしと見へしと不興せしかはさほど^(五オ)の御心底からは是非取返すべき様なしとて其通りにすき行き年の

二年余ありて此綿屋何かし借初に煩ひけるか彼実父をひそかに招き但兩人内蔵に入て金子貳千両箱より取出し相渡し拙者儀此度の病氣千に一つも本復いたしかたし貴殿より貰し悴拾五才に及ひ候時よき手代を見立仕にせの商ひ何にても見合て御相談頼入るなりたとへ死後に此子母と不和になり候とも十五才まで御介抱ありて此家相談頼み存ると手を合て申さるゝに病人の氣に背きてはあしく金子受取帰て三ヶ月計りすきて綿屋某し果けれ^(五ウ)は今後は家かねて思ひしまゝの世に成て百ヶ日たち後身上見分とは内證相違あれは此家立ち難しとて右の百両つけて惣領は実父へ返し出生の子を世に立べき工み藏の内を穿さくすれば貳千両入の箱たしかにあり今買置の賣もの千両は見へたり以上三千兩心のまゝの世になり後家目立薄けせう毎日寺参りの序に芝居に手代をつれ実子を乳母に任せ今の世の樂み後家と世間に沙汰する程の事なりしか見世の任せ置し手代大分の引負して何国ともなく欠落せり後家も頼み切たる手代にはなれけれども貳千兩入の箱に力^(六オ)つよく有年土用干に此箱のふたを明け小判つゝみたる封を切れば皆石瓦のみを包み置けるに肝をつぶし幾度も箱の内を吟味するに箱の底に一通りの書置と見へて自筆にまかひなく其文にいわく始実子なきゆへに養子いたす所に程なく一子出生せしにより今は養子うるさく思ふ心其方か顔色にあらはれし上は我死後に

至て必ず養子は歸すへしさあらば草葉の影にても本意なく思ふなり其時貯へ置たる貳千兩の金も忽ち石瓦と変し此家滅亡すべし若し心底を直し養子の何かし惣領に立るに於ては石瓦も^(6ウ)元の小判となるべしと書たるを後家見て大にあやしみ始の養子を返したるゆへ今石となり今又再び養子を迎へは石又金になるべしとは是全く養子の父の所為にして死なれし人の偽筆の遺書なりと疑ひ此趣奉行所へ訴へけり奉行養子の実父茶屋儀兵衛を召出され吟味ありしかは義兵衛申けるは私三男を綿屋の信兵衛へ養子にいたし度よし申候に付十三年以前遣し申候所に二三年の内実子出生申により私忤は取返し申へき由申候得は信兵衛承引不仕候忤度もらひ候上は実子何程出生すとも惣領に相立申へくとて却て^(7オ)立腹仕候是に仍て其分にさし置候所に信兵衛程なく煩ひ果て申べく二三ヶ月前に私をひそかに呼よせ金子を貳千兩預申度よし申候に付則預置候此もの拙者に申候はたとへ死後母と不和になり候とも此金子は沙汰なしにいたし忤十五才の時商賣を見立元手にいたし家相續を致し呉候様に申て程なく相果申候此もの、推量に違はす忤は私方へ返し申得とも死人生前の一言是あり候ゆへ右貳千兩預置候と申奉行聞し召れ則後家を召出されて段々御尋後家承申上けるは頼にいたし候手代金子盗出し欠落仕候^(7ウ)是によつて商賣の代物にもはなれ藏の内の今は石瓦となり始の

養子を迎返さば石も金となるべしとの書置有て今残るものとは本宅の外五間口の家うらに借屋御座候得とも是も賣申始末になり行候と申上る奉行仰けるは実子出生して養子うるさく始の約束変し親共方へ歸へしたる罪によつて金は石となりしもの也夫のみならず身を放逸に持たるゆへ天罪にて手代まで盗して欠落したり是汝か心より出たる罪その身をくるしむる所也死したる夫の遺言を堅く守り向後心を改らため養子を戻し惣領にして^(8オ)家をわたし実儀第一の実父義兵衛を後見に頼み家相續仕るべし然ば石瓦元の金子となるに違なき事也其方は別家の五間口の屋賃を取て隠居し二男を養育すべし町内のものとも此旨を相守らすべしとの嚴命に何れも奉行の裁許有難しと感伏せしとなり

評にいわく石を化して金とするは仙人の妙術ならてはなしうべからず綿屋の老人よく金を石にし又石を金を復す其手段奇々妙々なるかな

亦評にいわく此綿屋の何かし実に深き志し^(8ウ)なり右の貳千兩を石瓦とせずは後家忽ちに遣ひ捨此家ほろぶべきを智あつて是を病中にさとり実父に金子を預けて死後の事まで頼みけるゆへ此家さかへてさしも愚かなる後家までも怡ひける奉行の御捌末代までも感しけるとぞ

捷智に顯る二道の女の事

(六の三)

昔し都の側に独りの法師の住ける其隣に米の買置して身代仕損したるもの只夫婦はかりに成て此所に引込亭主は古しへの知音の方へ行歩て二三日も宿へ帰らず女房は宿に居て人の小袖^(9オ)をぬひ又はせんたく杯して世を渡る助けとす然るに此女房隣の法師と不義ありとて亭主疑ひける女房此事を隣へかくとつぐ坊主大に立腹して人も人にこそよれ出家に向て無実を言かけ堪忍ならずに不義の證據出せとて喧嘩になり互に棒にてたゝき合両方ながら疵をうけ町中のさわき以外の外にて已に上へ訟けり奉行の仰には夫か女房を不義ものとして詮義する事を汝は何として知りたると御尋の時法師申けるは其段女か知らせ申候といふ然らば己れは不義もの也女もし不義せぬ心からは夫の吟味を過分に思へき事也^(9ウ)されは女を去に七つある内に嫉妬ふかきを去る一つなれば是は夫を大切に思ふより女の愚痴にてうたかひ嫉妬するなり是によりてうるさく思ひなりしも過分なる筋一つ有故さのみ此科はかりにて去るものなしまして女的身ならば夫の吟味満足なるはつを他人の法師に語る所は我か夫よりも坊主を大切に思ふきざし有るゆへなり又其方も人の妻よりはほどの大事を聞へきいわれなし又男の方より僉義もせぬ内に盗人たけくしく己か方より言出す所は密夫に極たり少しも偽らは拷問して云わすへしとの^(10オ)御

意に女房ふるひ出し恥しくもあの坊主にだまされ候亭主留守には来て色々とたわむれ其うへにて申候我は高野山にて不思議の祈をさづかりしゆへ如何ほどの咎をもおゝひかくすなり其上河内の国には大分田地あり世に落ぶれたる男に添んより我か女房とならば還俗して河内へ連行榮花にさせんと申せしに心うかれていつとなく心したしく馴染たりと残らず白状しけるに法師も今は言葉なく差うつむひて居たるを取て罪に行れけるとなり

評にいわく早速此法師を密夫と思召御眼力^(10ウ)明らか也坊主何ほど弁舌よくいふとも天罪のがるまじ三衣を着し佛の門に入ながら女犯をなすのみならず盗人たけくしく己か方より業を招く事悪き奴と人々申けるとかや

亦評に曰法師元來心より佛道に入しにあらず世渡りのための出家なれはかたちは殊勝けなれと内心はやはり凡俗のまゝにてしかも好色の心は俗よりも深しとかく女の出家にちかよるはあしき事なり

家来主人となり主人家来となる事^(11オ) (六の四)

昔し都の町に富る商人あり男子はなくて娘ひとりもちけり是にめあわせて家を續すへしとて兼て甥を武人養置何れにても心人のよきを見立て子にせんと思ひけるか兩人ともに

大家を續へき才なく行末のほと心元なし又普代の下人幼少よりも心たまかにして世を渡る事にうとからぬと是を我か名跡にと思へとも差當りて式人の甥の父我ためには兄弟なからもおもわくをはかり兎角と日を暮し月を送る内に病に臥して臨終に及ふ時女を近付て本末もなき同じ様なる木を丸くけつり五寸計の箱に入是に其方か夫か名書(11ウ)ありとて泪と共に暇乞して果ぬさて此木を見るに一方の端には下人の名を書付一方には二人の甥か名を書し以上三人の男の名あり親の仕方なからも不審はれず三人に見へよとの事には有まじと内證にて一家とも罷出此木を吟味して何れとも埒明ねば奉行へ伺ひに出れば此木を御らんし小刀にて御けつり有て先本末か知れたり此下人の名を書付たる端は木の本なり此ものこそ家を續くへきものなり是と夫婦になつて名跡相續仕れさて二人の甥か名を書たるは木の末なれば本に随ひて下人となるべしまだも證拠あらんと庭上に投玉へば(12オ)此木二つにわれ中に一通の書置ありて

其文にいわく堯は天下を舜にあたへ舜は天下を禹に与へ給へり是天下を以て我ものとし給わす天下は天下の天下なるがゆへなり我等町人の卑賤の身といへとも先祖より受續し家督はとりも直さず其大切な事天下も同様の事也たとへ私実子といふともふはたらきの奢りつよきわがまゝいふものに家をあたふべきにあらず下

人といへとも忠孝の志厚きものを簪とし一家を譲るこ
と恐れおほけれども唐虞の君を手本とし奉る也此事奉
行所にて御慈悲に親類共一統承知仕候様被(12ウ)仰付
下されたく奉願候

と書たり奉行其遺書を取て讀聞せ弥下人を娘にめあはせ二
人の甥は以来下人を主人とかしつくべしと命せられければ
一家のものとも難有と感伏し其後遺書を皆々堅く守りて其
家繁昌せしとなり

評にいわく人の一身は天地の如しされは人は小天地と
いへり士農工商ともに各々その一家はそなはち天下の
ごとく主人たるもの大切になすべき事なり一家を名つ
けて小天下ともいひつべきにや(13オ)

欲には義を忘るゝ同商賣の事

(六の五)

昔し都の町に八百屋菜兵兵とて町内に年久しく住ものあり
しか奉行所へ訴出けるは私普代の宇八と申もの別家に罷成
て後私数年の得意をせり落に商賣をさまたけ申に付先年御
願ひ申上候得は御慈悲に此ものか商賣を御止め下され候得
は有かたく奉存候の所に又候此もの商賣を妨け迷惑仕候恐
れなから此段急度仰付られ下さるへしと願ひける奉行聞届
られ実に普代の下人として主人の商賣を妨る段不届の至り
急度其節云付たりさあれば主人のかまいになる仕方は有ま

しき筈を猶も此方よりかたく云付たるを^(13ウ) 背く段此度は吟味のうへ死罪にも云付へきと先其方は帰り一家とも談合して重て申上られと有ければ畏て御受申宿へ帰り女房に此よしを云へは女房少しの事はこらへ玉へ人の損する事なりとなためける又彼普代の手代は此事を聞もし死罪に合ん事はおそれて主人の商賣を俄に止めけるとかや奉行の智に依て双方浪風たゝす納りけるとなり

評に曰死罪にも及ぶまじき事急度仰付られしより主人は手代か身のうへを思ひ手代は此事を思ひ風聞にきゝておそろしく思ひ商賣をかへて主人の胸を休むこれみな奉行の心はかりに依て^(14オ) 濟けるとなん

亦評にいわく威あつて猛ならざる君子の徳にて威風を以て下を化す愚昧の小民罪を恐て過を改む刑置て用ひざるに至るへし

痘瘡を病し双鬢の給金の事

(六の六)

昔し都の遊女屋へ貧しきもの娘を金子百両に賣渡し遣べき約束にて手付として金貳拾兩請取置ける所に此禿痘瘡し美しき顔の引かへてみつちや兒になりければ買ふと言し轡中、取りあへずあまつさへ手付金をも戻せといふ賣人の方よりは是非約束の通りに金子を受取禿を渡さんといふ此事互に^(14ウ) 果てす奉行へ訴出ければ奉行仰けるは賣人の方

みつちや兒にならぬ先ならば百金の徳あるべきに渡さぬ内みつちやになりしかは百兩の不仕合なり儲買手の方には金子不殘渡し禿を受取て後みつちやになりたらば百兩の損たるへきにまた金渡しさぬ所にみつちやになりたれば百兩の仕合なり又みつちや兒になるへき禿をしらすして百兩に買と云約束仕たる所に不仕合あり双方の損と徳と仕合と不仕合と打合せて二つにわり百兩の禿を五十兩にして買取るべし賣渡すべしと仰渡されける御捌御尤と皆人云けり

評にいわく両人の轡互に欲に目か見へす論しけるか^(15オ) 此了簡に申わけなく事濟ける実にも思案被成候程ありて即座にかゝる御さばき珍しき公事と聞く人申けり

亦評に曰親として娘を遊女に賣事至て貧究故の事也遊女屋は金銀差支よき事なれば損したりとも可ならんか

板倉政要後偏卷之六終

(15ウ)

板倉政要後偏卷之七

目錄

- 一 鼠を罰して盜賊をあらはす事
- 一 嫁を変して養女とする事
- 一 無券契の借錢の事

- 一 色欲に迷ふ讓狀の事
- 一 富貴の人難を通る事
- 一 姉姪相ともに児を争ふ事
- 一 井の内の死骸の詮儀の事

(16オ)

(16ウ)

板倉政要後偏卷之七

鼠を罰して盜賊をあらはす事

(七の二)

昔し都の町に針うりの女盲目あり夫もなく子もなく独暮しけるが朝は霧を拂て袖のしめりもいとひなく商ひに出て夕べにいたゝく星のかけも見ねば行違ふ人に當るを氣のどくに思付たる杖のかしらに鈴を付てからゝとならず故に行かゝる人も此鈴の音にて除て通れはめくらの独歩行も心易く歸る道にて銀子入たる袋につまづき倒れ起あかりしまゝに是を取て歸りうれしく明けなば奉行へ持出て此(17オ)金落したる人へ歸すか又は尋る主もなく我等か貰かと一夜寝もせず夢のやうに覺て其夜此袋を盜れけるさはいへ拾ひたる事は違ひなければ後日のためと思ひ奉行へ出て此段を申上ければ其拾ひたる銀子何程と覺けるそこれにて其分量を引て見よと赤土を盲に被遣ければ手にて探りつくねたる土の重さを御覽に入凡銀子五百匁ほど、見へける偕此盲目か家主を召され独り住居の女か拾ひたる銀子を夜中に失ふ事

裏からも表からも盜人の入たる跡見へぬと云へは定て是は鼠か引たるものなるべしいそき店中の鼠を狩参れと御意に依て家主宿へ歸り(17ウ)鼠を狩出し七疋連れ参るに最はやいはかりかとの御意に随分吟味仕候得とも此七疋より外に相見へすと云へは然らば此鼠御詮儀とけらるゝ旨あり夫また家主へ御預被成るゝ間随分大事にいたすへし若し取にかすか怪我などさせたらば其方か越度たるべしと重き仰付に家主迷惑なから預歸りける其夜仰付に家主も盲目の女か内へ何くともなく鳥目五貫文なけ込て歸りける此段を又訟ければ未御詮儀残たり弥鼠を大事に仕れと計にて錢の事は更に御沙汰もなく重て銀子五百匁投込て歸る此よし申上るときに最前盲人か土にてつくねたるものと此銀子と(18オ)御くらべ遊してもはや鼠の儀は御預を御免ある間勝手次第に追放すべし扱又五百目の銀子は女か拾ふたるものなれば被下るゝ也又五貫文の鳥目は鼠か外の所より引来るものなるべし是をば家主へ預け被下るゝとの仰にて何れ御前を退きけり

評にいわく実は家主の盜取たるとはやくも御覽被成けれとも元來拾ひたる銀子なれば自己のものを盜れたるやうに御詮義もなく鼠になそらへさせ玉ひ盲人か失ひたる銀を出させ五貫文は家主か出し少しと思召しかくは仰付られしとかや(18ウ)

亦評に曰毛詩に鼠を相るに躰ある人とし礼なくんは何
そとく死せざるやといへり盲女の金銀を盗取たるはま
ことに鼠にもひとしき愚人なり奉行は猫の逸物のこと
し先より彼家主か盗たる事を一日に睨まれしより鼠に
托して人を損せず慈愛深しといふべし

嫁を変して養女とする事

(七の二)

昔し都の町に貧しき職人の娘に勝れたる美人ありけり其近
辺に富貴なる商人の独子此娘を見初戀せしに両親聞て息の
氣にさへ入たる女ならは何程まつしきもの、娘なるとも嫁
にもらわんと仲人をもつて^(19オ)此事云入れけるに娘の親
き、過分には候得とも當座の掬もなりかたき由を申に付金
子貳百両早速遣し掬次第に呼迎へる約束せし所此聾頓死を
しけるに両親歎の余中陰過ると其俣彼こしらへ金を返せと
いふ娘の親は返すましきと云争ひ互に果すして終に御前へ
申上けり奉行双方の申分を御聞のうへ仰らるゝには娘の親
金子貳百両を以て嫁にやる筈なれば嫁はすじに寡なり若き
ものを何までも後家を立させふとも舅しうと女の心次第未
た子のなき後家は角家の例もありよくこゝを合点をせよ殊
に云名付の夫となれとも其服忌已に婚姻とゝのひととし
^(19ウ)律書にもあり其上汝か望なればこそ此ほと廣き都の
内に身代相應の者も有んにあの者の娘を取向んと其方か云

出して仕度金まで遣したる事なればこゝをよく心得よとの
御意なれば双方ともに暫らく首をかたむけて重て聾の親申
けるは一旦嫁に貰ひ上は則我が娘にて御座候といふ又娘の
親申はなる程其方へ遣したるからは此方の子にては御座な
きよしを申上る其時奉行仰けるは兩人ともによく合点いた
したり此上は嫁にこしらへを添て不通の養子に遣すべし又
聾の親も娘に貰ひて随分不便をくわへ相應の聾を取家相續
仕れ是はまさしく仕人めか腰^(20オ)押して公事に及すもの
なれとも双方得心のうへ暫らく御詮義をさし置てとの御意
にて両方罷立けるとかや

評に曰是は内證にて濟べきを仲人か腰を押してかくま
て公事になりたるとの眼力は違ふまじ初より娘に貰ひ
て一家の内より養子をして是にめあわせ家相續仕候と
仰られべき所を両方の心入御探御覽あれば仲人罷出て
是を取扱ふべき所なり然るに何の言葉も出さず両方の
親ども御前の御心入を感じ得心のうへなれば斯てはす
みけるとかや^(20ウ)

亦評にいわく仲人双方腰押して争論に及ふ勝たる方よ
り金を取へき謀なりと奉行察知せられし実に明智とい
ふへきや

無券契の借錢の事

(七の三)

昔し都の町に両替屋の金兵衛とて身上宜しき商人あり此手代早四郎隣町の小商人に錢五拾貫文内證にて借しけれども日頃懇意の余りに手形をも取らず打過ぬ然るに此手代かり染に病に臥しけるか十死一生の時に此錢に商人に取り替たるよしを主人にいふ主じ早速此もの方へ人を遣し其方へ錢五拾貫文かしたると云手代只今急にとり^(21オ)詰たるに依て申聞すなりといふ小商人何とも返事いたさぬ内に此手代相果けり主人方より其後に商人の方へ借したる錢を催促しけるに曾て一錢も借りたる覚えなしといふ是早四郎が病死を幸に借金を濟すましの姦計なり是非なく此段奉行へ言上申けるに双方召出され御聞の上にて小商人に仰らるゝは是は其方借りたるに紛れなし急度相濟すべし手形もない事にて達て借らぬとつのは拷問して言わすへし先人に借らぬ錢を借したりと云懸られなば無実なり是は堪忍ならぬと己か方より町所へも断又は評定所へも訟出てゝ事を糺す^(21ウ)へき所だまりて居たるは何としても心くらし正直を以て己か心を見よと理非あきらかに御意に彼者赤面して感伏し退きける両替屋金兵衛も少分の事ながら手代不義を憎み其借錢残らす取戻したりとなり

評にいわく此手代日頃心易く出入して懇意也しゆへ手形をもせずして借したるをおふちやくものゆへ手代の

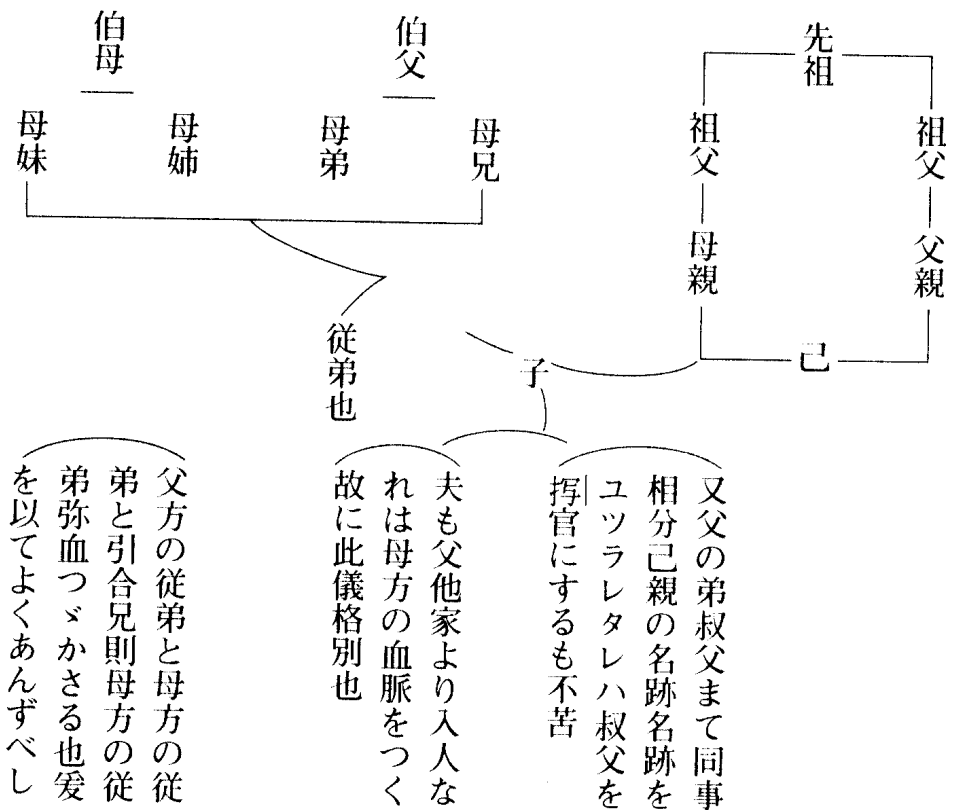
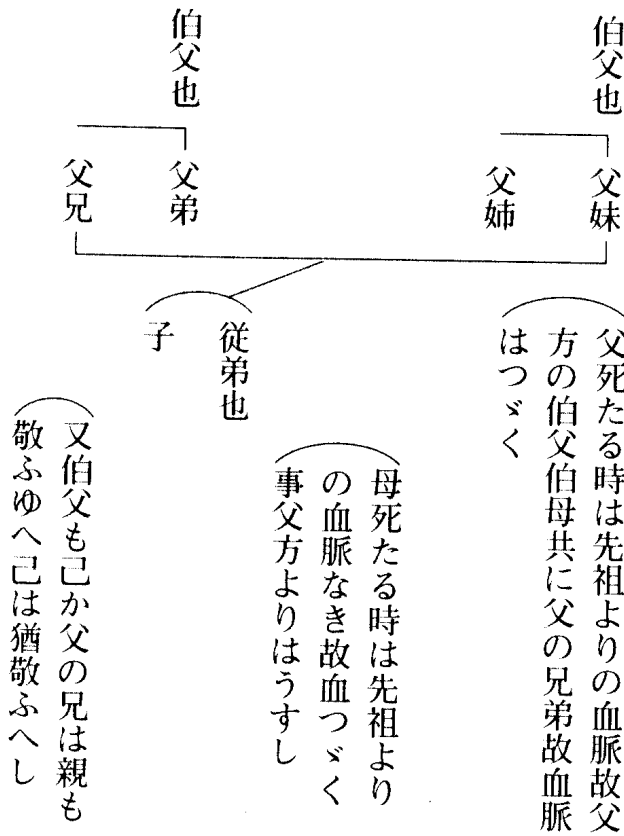
病死を幸にて濟すまじきとせしかとも御捌の理非分明なりし故偽る事能はずして終に赤面に及ひける也両替屋も五拾貫文はかりは損にもいたすべきか彼か心底のよからざるを憎て公邊とはなりけり一錢の了^(22オ)簡もいたさす五拾貫文のこらす取返しけると也亦評に曰契券なくして金銀を借すも是朋友の信義によれり義に背て利に拠るときは怨多し宜なるかな

色欲に迷ふ讓狀の事

(七の四)

昔し都の町に其身有徳なる町人美太郎酒色に長し本妻の外に妻数多有りけるか此もの廿八才にして不養生故病死せり妻にも妾にも子の有ける故跡式の訴訟に出ける則書置を奉行御覽あるに本妻くねに金百兩遣して何方へなりとも縁付へし此妻の腹の惣領の男子に五百兩さて妾うへに百兩^(22ウ)此腹の女子に三百兩又三年以前にかゝへたる妾あしに五百兩遣し尼になるべし此妾の産たる式才になる忤に身代不残讓るなりとの書置なり奉行此書置を御覽なされ何さま此も金銀多く持たる故に身持放埒にして人の異見も不用我まゝにつのり大酒をのみ甘きものを多く食し大勢の妾を受し実には不養生のみにて遂に年若にて病死したるものなるべし惣領の男子に身代不残讓り本妻は後家をたてゝ後見いたすべしと有べき所にさはなく縁付勝手次第と書しは常々本

妻異見かましき事を言しを却てうとましく思ひ又^(23オ) 若
 き妾のいまだ馴染もなきものに金を多く遣して尼になれと
 書しは此女に心を取乱れし執着深く此女か産たる子を名跡
 に立るいづれ酒におぼれ正体もなき奢ものと思召埒もなき
 遺言なりとて此死たるもの兄弟かあらは連出よと御意に町
 のものとも申上しは彼か弟壱人御座候商賣の儀に付江戸に
 罷在候と申則其もの召登せ其弟死たる兄の身になりて書置
 を仕替て来れと申べし此方にも案文一通した、め道理を引
 合て見へし外にも遣す物ありとて硯を御取寄なされ^(23ウ)



是のことく

(24オ)

頃中あしき親類にても其恨みを捨て先祖よりの血脈の濃と薄きとの筋目の差別を思ひ計て随分真すくにすべしたとへ嫡子なれとも家をつく事のならぬ生付ならは二男三男にてもその家をつくへききれうに随ひて名跡をゆつるへし家久しければ先祖への孝行又子孫へ慈悲也この事ともは誰も知りたる事ながら我身に引^(24ウ)受たる時は了簡違ひ死る期には由なき邪氣を起し跡にて人に笑るゝ也と事細かに御意にて其後弟理次郎江戸よりかへり奉行のくわしき教を聞て難有しと感涙を流し実に兄美太郎か書置の通りに家督定らは兄弟の次第不順なるのみならず一家大乱起り滅亡すべしといそぎ亡父に代て正しき理に従て遺書を書直し町内役人の認とともに差出しけり奉行二通の遺書と自分の認をかれし壺通と以上三通を一度に披てよみあけられしに三通文言こそ各主意は違へとも推量に毛頭違ひなく本妻の腹の男子家をつき妾への讓金も新古の差別^(25オ)にて多少程よく定たりければ奉行其通にいたすへきよし申付られけると也

評に曰此書置は色に迷ふて妾の言葉に魂を失ひ酒に乱れ書たる讓状也と思召に違はす本妻は夫の淫乱なるをなけき折ゝ異見を云けるを金言耳にさかふとやら此女嫉妬深りきと思ひけるにや本妻をうるさかりて昼夜妾の元に暮しけるか果して病に臥しけるとなん

亦評にいわく萬事少も私の勝手つくの心にて取はかる

時は皆相違す天下の道理明らかなる所にて取計ふべし遺言は死の時節に臨自ら心も正し^(25ウ)からす迷ひて乱命といふ事あり平日正しき時によく譲り置へき事なり

富貴の人難を通る事

(七の五)

むかし都の町に有福なる商人あり下女の美なるをかゝへ置て折ふし手をつけしか此事下女のおやほのかに聞て折ゝ金の無心を言かけし程に後には不絶無心に来りければうるさく思ひそれよりしては手も付けず金子の無心も聞さりしか或時この召仕の下女行へなく逃走りけり彼の走りたる下女のおや奉行所へ訟へけるは我かひとり娘を主人殺し死骸を水中に沈めたるよし難だいを^(26オ)申かける是は最前度ゝ無しんを申けれども主人切ゝの事ゆへ殊の外に腹立して合点いたさざりし恨みのかゝる幸ひ此難だいを云かけこまらせし也人を殺せる科なればむつかしくなりけるか奉行此事うたかわしく暫らく此公事裁許延引いたせしか十日あまりも日数をへしゆへに時の人福人まいないをして此公事を治めたる杯と言けるか奉行所より彼欠落せし女をきひしく僉議ありてほとなく女を尋出し責問ければ私に不儀の白状すほうばいの男としてにけたるよしやかて女の父をめし引合せ如此まめそくさいにて^(26ウ)達者ににけあるく女を何

ゆへ殺されしと主人へ無実を云かけしと叱られければ父母大に驚きて金の無心聞入られぬ遺恨を晴さんため偽り申せしとあやまり入て白状せしかは所拂となり是に依てかの主人はあやうき難をのかれける

評にいわく此下女美なる故に主人も手を付たるか二親よく薄きものならば後には本妻とかなるへきを主人富貴なるを切く無心を言かけ見かきられけり元より此下女もいん乱なる故近邊の若き男とも密通して此家をにけ出ける也夫を幸に主人より金子^(27ウ)をねだり取らんとたくみけれども主人此事思ひかけなき無実なれば金子少しも出し扱ふ事なし夫ゆへ公事になりたるなるべしされども奉行此事をさとり此下女を見知りたるものに女のあり家を尋させ給ひける間かく日のへをなされけるとかや

亦評にいわく禍さまくあり病氣となるか或ははぢをかくか或は罪科にあふかなり慎しむべきは女色なるへし

姉姪相ともに児を争ふ事

(七の六)

昔し都の町に富有なる大商人兄弟至て中よき^(27ウ)一家に同居なしけるか兄弟の女房とも同時に懷妊せり何れなりともさきに生れたる男子を家の惣領に立べしと約束しあいよ

めどし競て男子を産せんとせしに兄嫁の子は胎内にて死したり然るを死たる事を深くかくして披露せず弟姪男の子出生せり兄姪も同じく産所にありて男子を産すと称す実は弟姪の子を奪取て己か子とす是を論する事三年に及べり既に此事奉行所へ申上げる間双方召出され詮義あれともたかひに證據なき事なれば奉行もあぐませ玉ひけるか暫し思案し此子をしらすにて人に抱かせ置きさて兩人の女房を御前へ召され^(28ウ)両方ともに證據正しからされば何方へも定むべき證據なし此上は面々の仕合しだいに取り勝べしとて彼の子を真中へ置兩人の姪に奪わせ給ひけり兩人なから抱きとらんといさみしか兄姪はその児の足の痛まん事をもちとわずあらけなく持ちあつかひ早くもきはなち取り勝ちたり弟姪は子の痛まぬ様にさわりける故負けるを奉行頓て是に目を付て兄姪の産する所の実子非と醫師迄詮義してそのとがに所せられ子は弟姪にあたへられけるとぞ

評にいわく兄姪は心奸たま敷く我子の胎にて^(28ウ)そこね流れけるを深くかくし其まゝ身もちなるふりをしすぎ行所に弟姪は事ゆへなくあるか月に玉のやうなる男子をうみけり是を聞彼兄姪も其時分に産する杯と偽わり言て弟姪の子を奪取り我か子なりといふければ互に争ひ公事にはなりけれと奉行の眼力には及ひかく頭れけると也

亦評に曰婦人の情よくねたみよくうらやむ於是子を争ふにいたる面色はやさしくうつくしけれども内心おそろしきもの也

井の内の死骸の詮義の事

(29オ) (七の七)

昔し都の町に夫婦たゝ商人暮らす商人有しか夫四五日も外へ出てかへらさりける所に隣人來り隣町の井の内に死人有るよし語りけるを妻おとろきて急き井のほとりへ行のそき見て是こそ我が夫よといふて泣悲しみ居たりければあたりものとも出合ひ此趣き奉行所へ訴へける所に奉行仰けるは汝等も慥にかれか男と見付たるやと御尋あるに何れも申けるは底深き井の中の事にて候上はたしかに夫とは見わけかたく候旨申上るに付そこにて奉行仰けるは深き井の中なれば汝が見わけかたきと申所に女壺人行とひと(29ウ)しく我夫と見定めたる不審なりとて急き此女を拷問せられけるに頓て白状しけるは密夫と謀て相談して殺し井の内へ入置きたるよし顕れ急きその密夫もめしとられ式人とも重き刑罰に行はれしと也

評に曰奉行の眼力疊らぬ鑑のことく何れも氣の付さる所に心を付られ詮義あれは何かほど工みかくすとも其罪のがれかたし此女御らん有よりはやく是と推量ありしとかや

亦評に曰あわれむべし一丈夫たるもの淫婦の毒手に害せらるゝ事奉行の明密あらざんば(30オ)いたづらに水底の冤罪となるべし

板倉政要後偏卷之七終

(30ウ)